

文化財調査出土遺物仮収納保管業務

昭和63年度発掘調査概要

1989. 3

賀県教育委員会
滋賀県文化財保護協会

文化財調査出土遺物仮収納保管業務

昭和63年度発掘調査概要

1989. 3

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

序

埋蔵文化財は私たちの祖先が営んだ生活の痕路であり、大地に残された歴史資料であります。

この中には、数千年もさかのぼる縄文時代から数百年前の江戸時代のものなど、いろいろな時代に、さまざまに生きた人たちの足跡が残されています。獣を追い求めた縄文人、新しく農耕をとりいれた弥生人、古墳を築いた豪族など、埋蔵文化財はあらゆる時代の歴史をさぐる不可欠の資料といえます。

現代は、私たちの祖先の歩んだ歴史の上に立脚しており、この歴史を認識することは、私たちの日常生活をより豊かにするものと思います。しかし、埋蔵文化財調査の成果を直ちに咀嚼して現在の生活に役立てることはそう容易な事ではありません。こうした調査や研究を地道に積み重ねることによってはじめて面的にも立体的にもその地域の歴史を再構成することができるのです。

ここに水資源開発公団事業に伴う事前発掘調査の成果を取りまとめましたのでご高覧に供したいと思います。この一書が私たちの生活に少しでも役だつ礎となれば幸甚です。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力をいただきました地元の方々ならびに関係機関に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成元年 3 月

滋賀県教育委員会

教育長 西 池 季 節

例 言

1. 本書は、文化財調査出土遺物仮収納保管業務に係る埋蔵文化財の発掘調査概要である。
2. 本業務は、水源開発公団琵琶湖開発建設部からの依頼を受け、滋賀県教育委員会を主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会が実施機関となって行った。
3. 本書には、昭和63年度に実施した12遺跡21ヵ所を収載した。
4. 本業務の事務局は次の通りである。

滋賀県教育委員会	(財) 滋賀県文化財保護協会
文化財保護課長 堀 出 亀与嗣	理 事 長 吉 崎 貞 一
課 長 補 佐 小 川 啓 雄	事 務 局 長 中 島 良 一
埋蔵文化財係長 林 博 通	調 査 普 及 課 長 田 中 勝 弘
管理係主任主事 山 出 隆	総 務 課 長 山 下 弘

5. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。

目 次

序

例言

1. 今西舟溜航路浚渫 延勝寺湖底遺跡	1
2. 延勝寺・海老江舟溜航路浚渫(1) 延勝寺湖底遺跡	3
3. 湖岸堤新守山川その4 小津浜遺跡	5
4. 湖岸堤赤野井南その2 赤野井湾遺跡	9
5. 湖岸堤赤野井北その1 赤野井湾遺跡	11
6. 常盤農水 烏丸崎遺跡	13
7. 湖岸堤津田江その1(3・4) 津田江湖底遺跡	15
8. 湖岸堤下物その2(E)・(F) 烏丸崎遺跡	17
9. 志那沖 志那湖底遺跡	19
10. 湖岸堤北山田 北山田湖底遺跡	21
11. 津田江給水内湖送水管 津田江湖底遺跡	23
12. 新草津川河川改修(1) 北萱遺跡	25
13. 湖岸堤津田江その2(1) 津田江湖底遺跡	27
14. 湖岸堤津田江その1(5) 津田江湖底遺跡	28
15. 志那漁港航路浚渫 志那湖底遺跡	29
16. 南湖航路 栗津湖底遺跡	31
17. 南湖航路浚渫 栗津湖底遺跡	33
18. 唐崎マリーナ 唐崎遺跡	35
19. 大溝漁港航路浚渫 大溝湖底遺跡	37
20. 針江大川舟溜航路浚渫(2) 針江浜遺跡	39

挿 図 目 次

図 1	調査地点位置図 (1・2)	(1)
図 2	調査地点位置図 (3・4・6～9・11・13～15)	(2)
図 3	調査地点位置図 (5)	(3)
図 4	調査地点位置図 (10・12)	(4)
図 5	調査地点位置図 (16・17)	(5)
図 6	調査地点位置図 (18)	(6)
図 7	調査地点位置図 (19)	(7)
図 8	調査地点位置図 (20)	(8)
図 9	今西舟溜航路浚渫 トレンチ位置図	1
図 10	今西舟溜航路浚渫 土層図	2
図 11	今西舟溜航路浚渫 平面実測図	2
図 12	延勝寺・海老江舟溜航路浚渫(1) トレンチ位置図	4
図 13	延勝寺・海老江舟溜航路浚渫(1) 調査区全体図	4
図 14	延勝寺・海老江舟溜航路浚渫(1) 斜層理のできかた	4
図 15	湖岸堤新守山川その 4 トレンチ位置図	5
図 16	湖岸堤新守山川その 4 A区遺構検出状況	6
図 17	湖岸堤新守山川その 4 B区遺構検出状況	7
図 18	湖岸堤赤野井南その 2 トレンチ位置図	9
図 19	湖岸堤赤野井南その 2 遺構検出状況	10
図 20	湖岸堤赤野井北その 1 トレンチ位置図	11
図 21	湖岸堤赤野井北その 1 調査区(北区)地形および土層断面図	12
図 22	常盤農水 トレンチ位置図	13
図 23	常盤農水 トレンチ配置および遺構図	14
図 24	湖岸堤津田江その 1 (3・4) トレンチ位置図	15
図 25	湖岸堤津田江その 1 (3・4) 土質柱状図及び堆積環境変遷図 (珪藻分析による)	16

図26	湖岸堤下物その2(E)・(F) トレンチ位置図	18
図27	湖岸堤下物その2(E)・(F) 遺構概略図	18
図28	湖岸堤下物その2(E) 遺構平面図(第2遺構面)	18
図29	湖岸堤下物その2(E) 土層断面図	18
図30	志那沖 調査地点位置図	19・20
図31	湖岸堤北山田 トレンチ位置図	21
図32	湖岸堤北山田 トレンチ土層柱状図	22
図33	津田江給水内湖送水管 試掘トレンチ位置図	24
図34	津田江給水内湖送水管 土層図	24
図35	新草津川河川改修(1) トレンチ位置図	25
図36	新草津川河川改修(1) 平面実測図	26
図37	新草津川河川改修(1) 土層図	26
図38	湖岸堤津田江その2(1) トレンチ位置図	27
図39	湖岸堤津田江その2(1) 平面図	27
図40	湖岸堤津田江その1(5) トレンチ位置図	28
図41	湖岸堤津田江その1(5) 平面図	28
図43	志那漁港航路浚渫 トレンチ位置図	29
図44	志那漁港航路浚渫 調査区全体図	30
図45	志那漁港航路浚渫 土層柱状図	30
図46	南湖航路 調査地点位置図	32
図47	南湖航路浚渫 調査地点位置図	34
図48	唐崎マリーナ 調査地点位置図	36
図49	唐崎マリーナ 土層柱状図	36
図50	大溝漁港航路浚渫 トレンチ位置図	37
図51	大溝漁港航路浚渫 平面実測図	38
図52	大溝漁港航路浚渫 土層図	38
図53	針江大川舟溜航路浚渫(2) 調査トレンチ配置図	40
図54	針江大川舟溜航路浚渫(2) トレンチ西壁土層図	40

図 版 目 次

- 図版一 今西舟溜航路浚渫 (1)トレンチ全景
(2)木器出土状況
- 図版二 延勝寺・海老江舟溜航路浚渫(1) (1)水平面に見える斜層理の様子
(2)断面に見える斜層理の様子
- 図版三 湖岸堤新守山川その4 (1)調査区周辺全景(手前が調査区)
(2)旧河道検出状況(南より)
- 図版四 湖岸堤新守山川その4 (1)第1遺構面(北より)
(2)第2遺構面(北より)
- 図版五 湖岸堤赤野井南その2 (1)旧河道1検出状況(南より)
(2)包含層木製品出土状況
- 図版六 湖岸堤赤野井北その1 (1)調査状況
(2)遺物出土状況
- 図版七 常盤農水 (1)調査状況(北から)
(2)T6遺物・遺構検出状況(南から)
- 図版八 湖岸堤津田江その1(3・4) (1)1-4区全景(南より)
(2)1-3区土壇
- 図版九 湖岸堤下物その2(E)・(F) (1)下物その2(E) 第2遺構面
(2)下物その2(F) A区第1遺構面
- 図版十 湖岸堤北山田 (1)調査地遠景(南東から)
(2)調査状況
- 図版二 津田江給水内湖送水管 (1)作業状況
(2)トレンチ断面
- 図版三 新草津川河川改修(1) (1)トレンチ全景
(2)土器出土状況
- 図版三 湖岸堤津田江その1(5)・その2(1) (1)調査前状況
(2)調査前状況
- 図版四 志那漁港航路浚渫 (1)調査前状況(西より)
(2)調査区全景(西より)
- 図版五 南湖航路・南湖航路浚渫 (1)南湖航路 出土遺物(押型文)
(2)南湖航路浚渫 作業状況
- 図版六 唐崎マリーナ・志那沖 (1)唐崎マリーナ 調査状況
(2)志那沖 作業台船

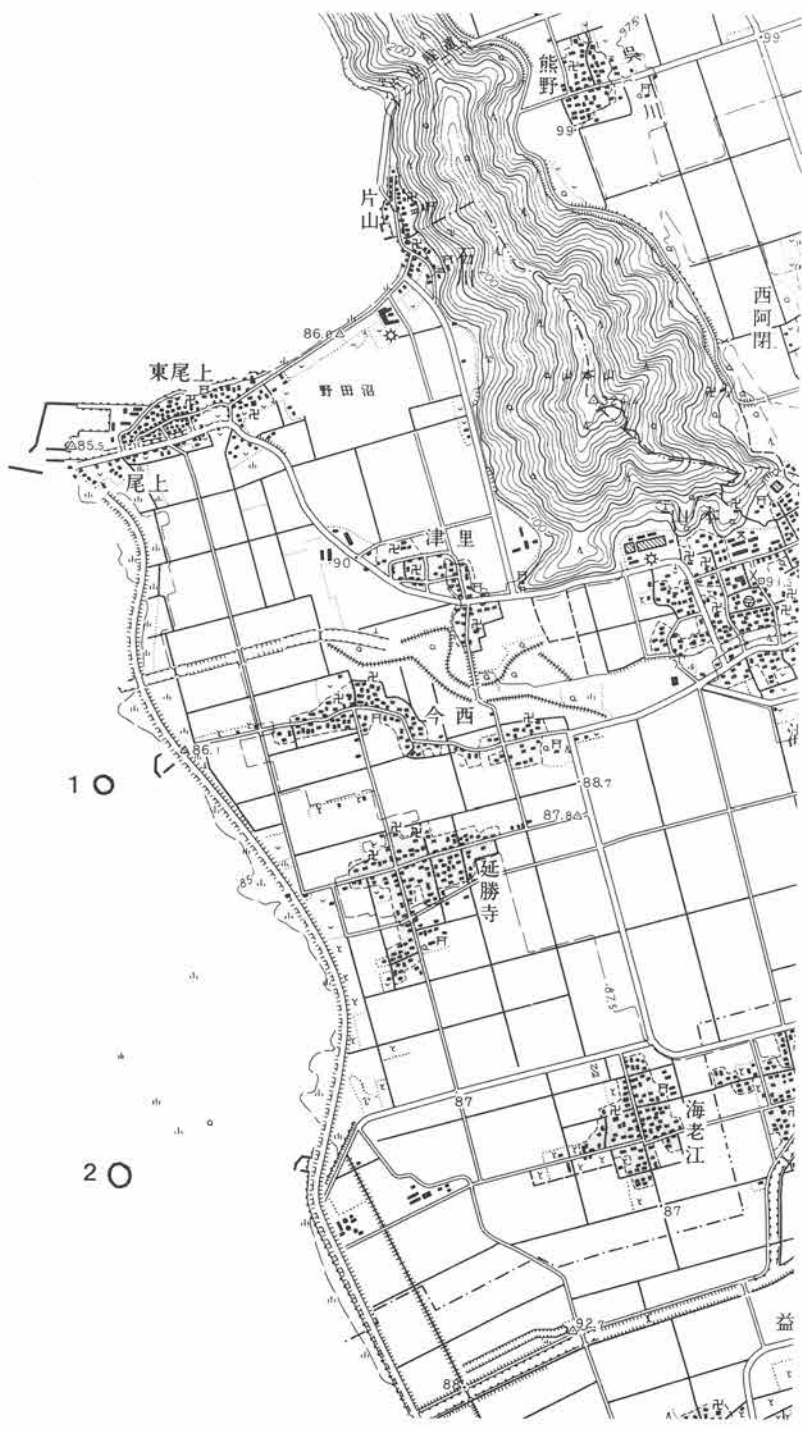


図1 調査地点位置図(1・2)
 (No.は目次番号の遺跡と一致、以下同じ)

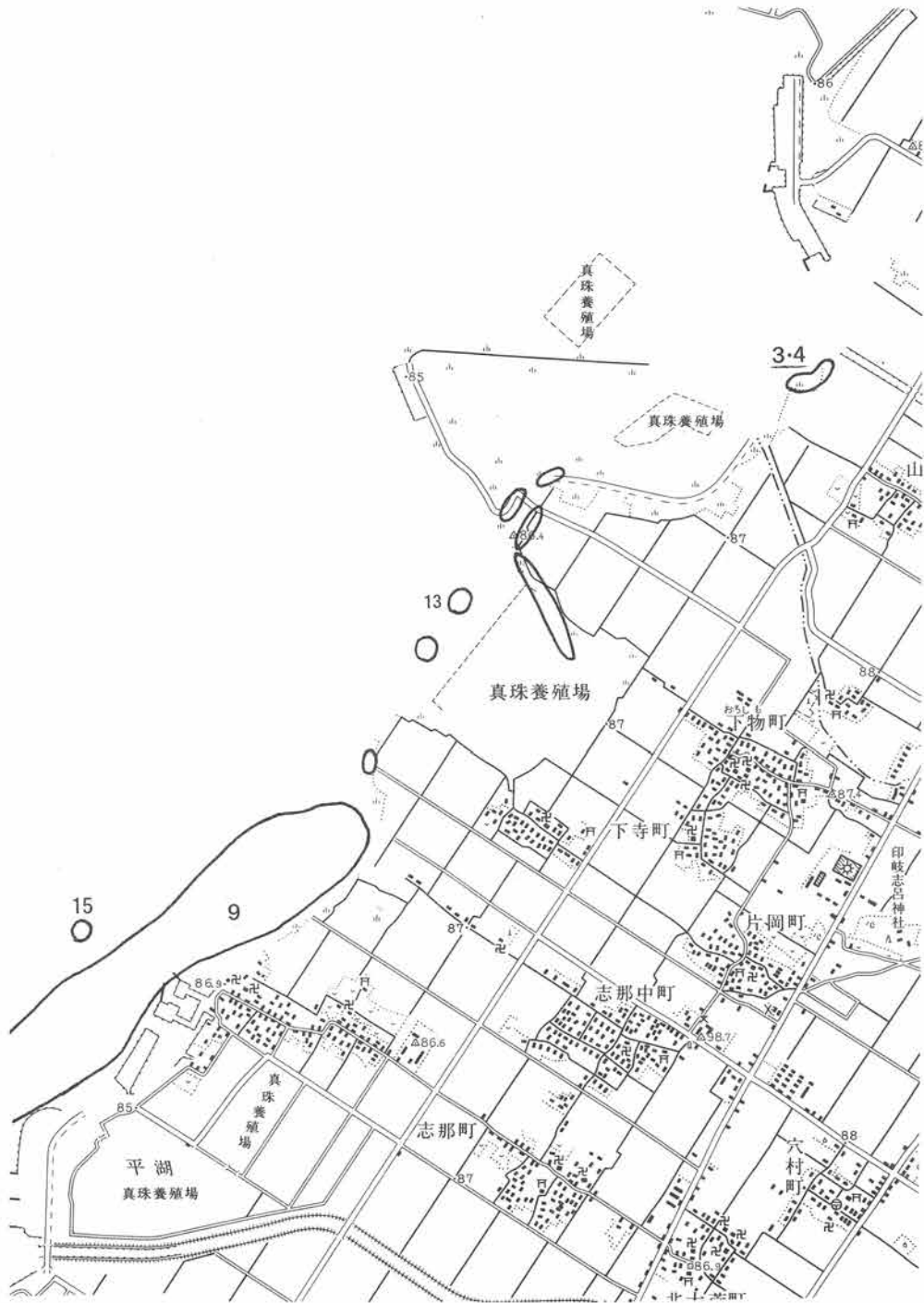


図2 調査地点位置図 (3・4・6～9・11・13～15)



図3 調査地点位置図(5)

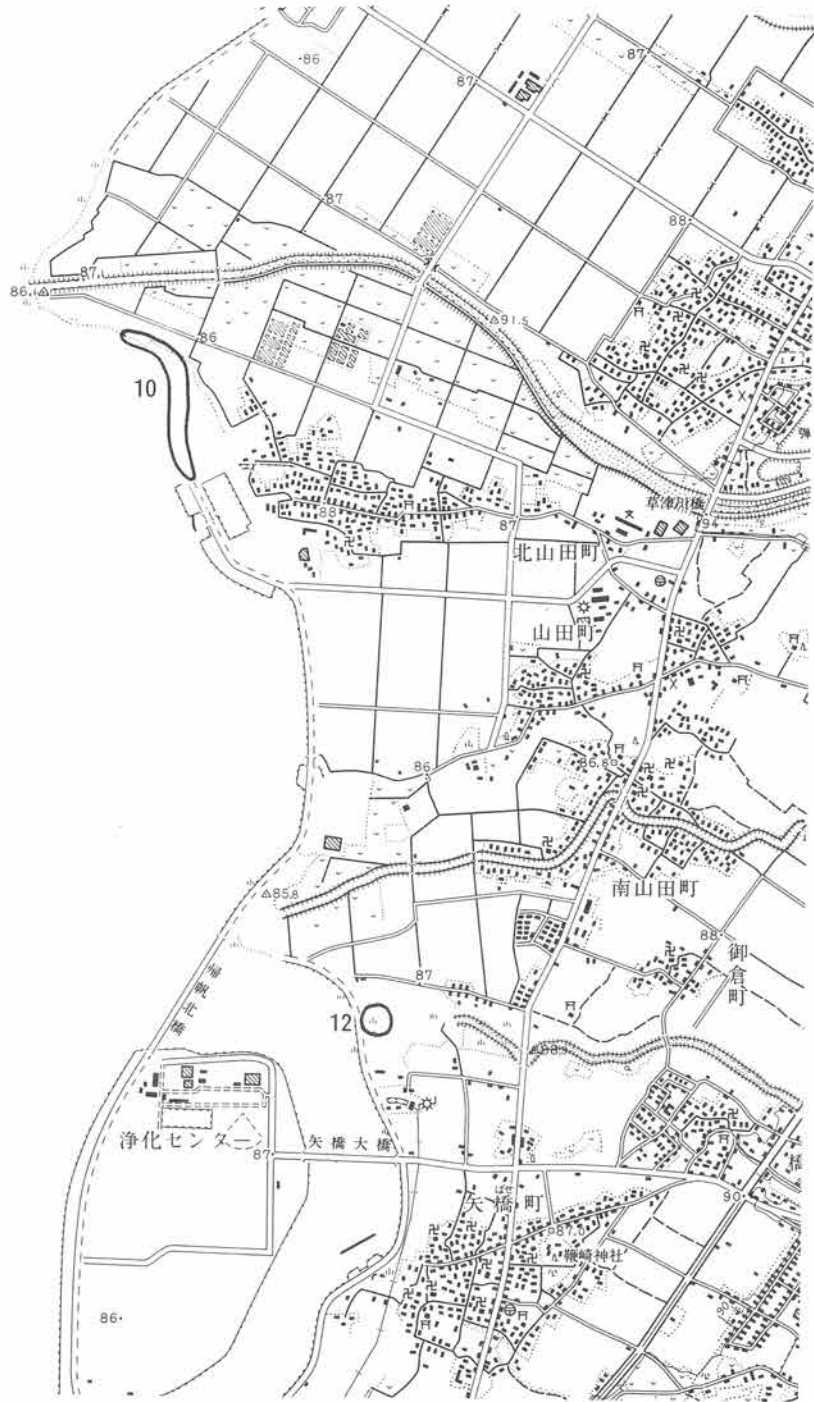


図4 調査地点位置図 (10・12)

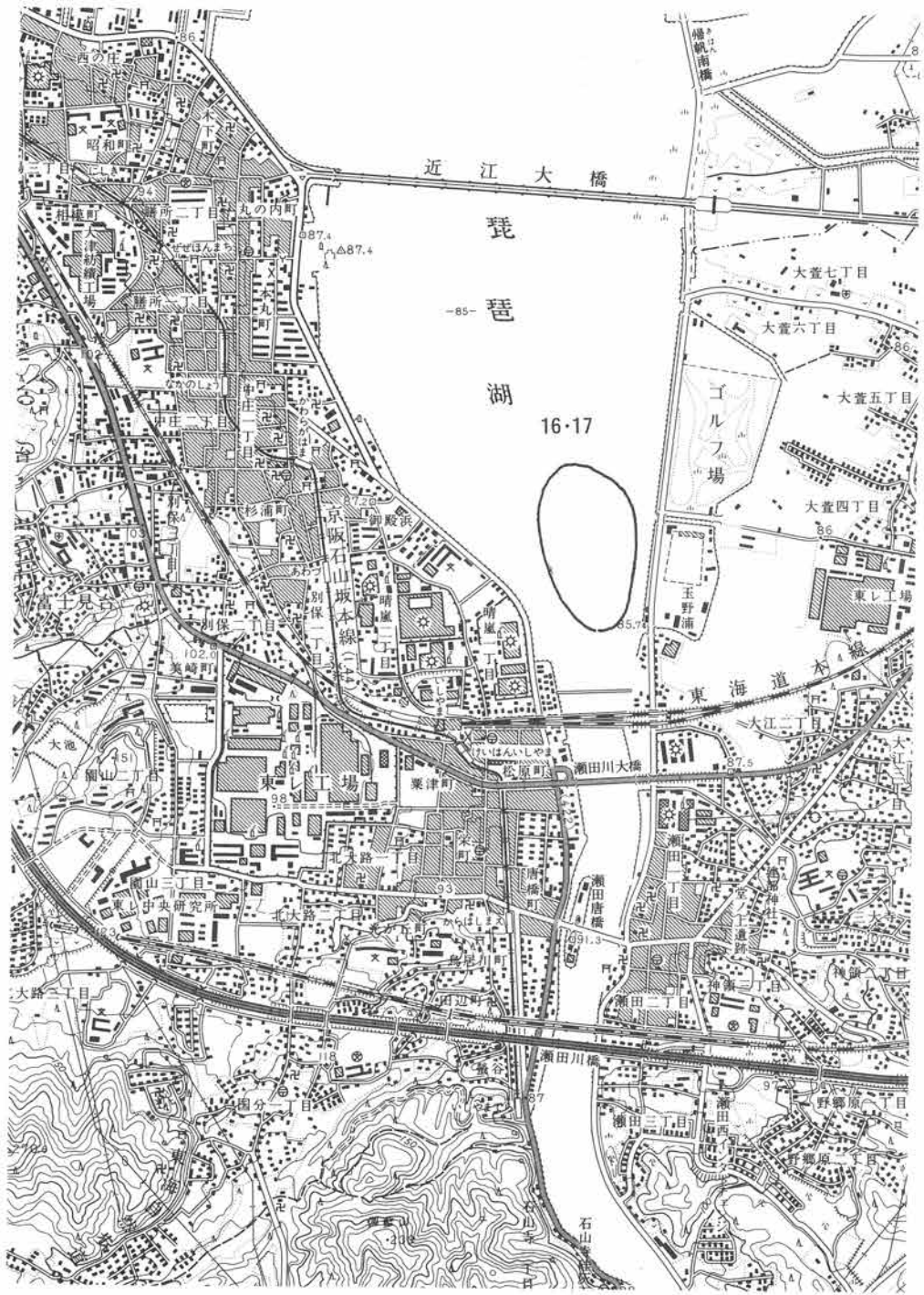
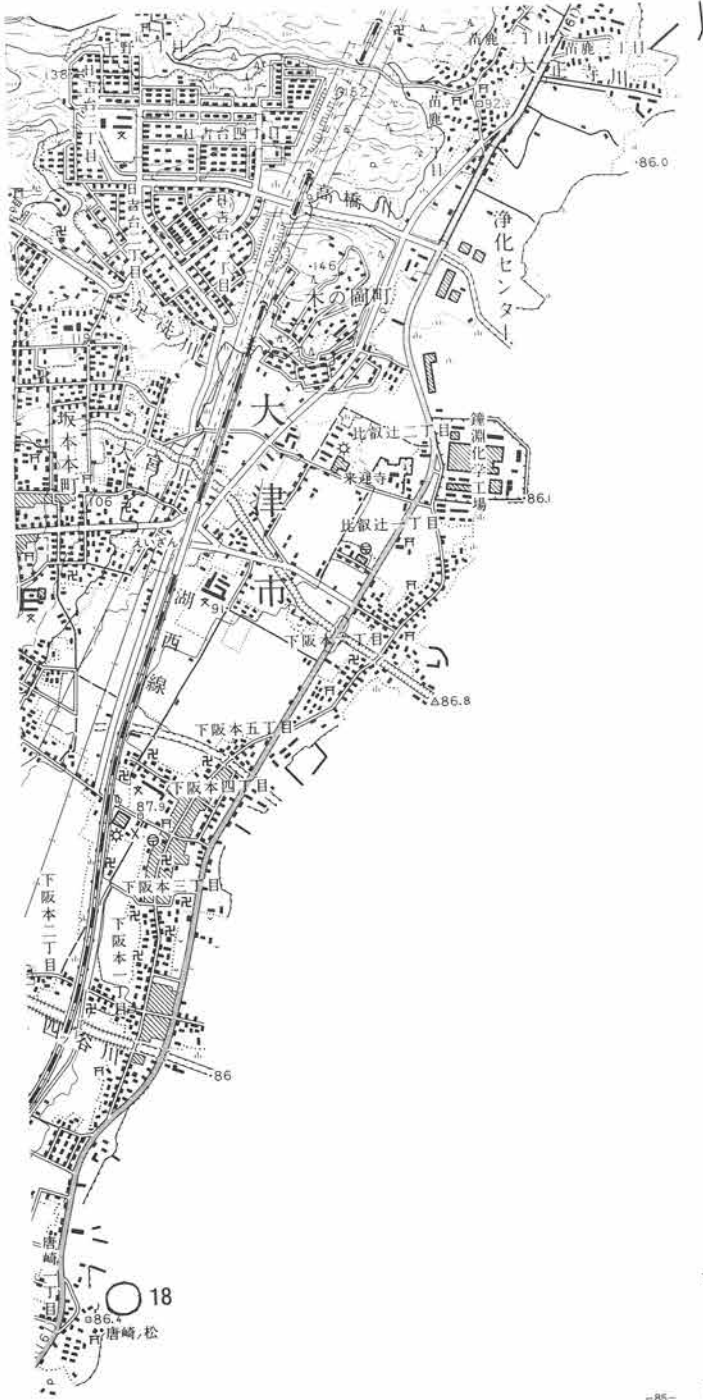


図5 調査地点位地図 (16・17)



琵琶

-85-

琵琶

図6 調査地点位置図(18)

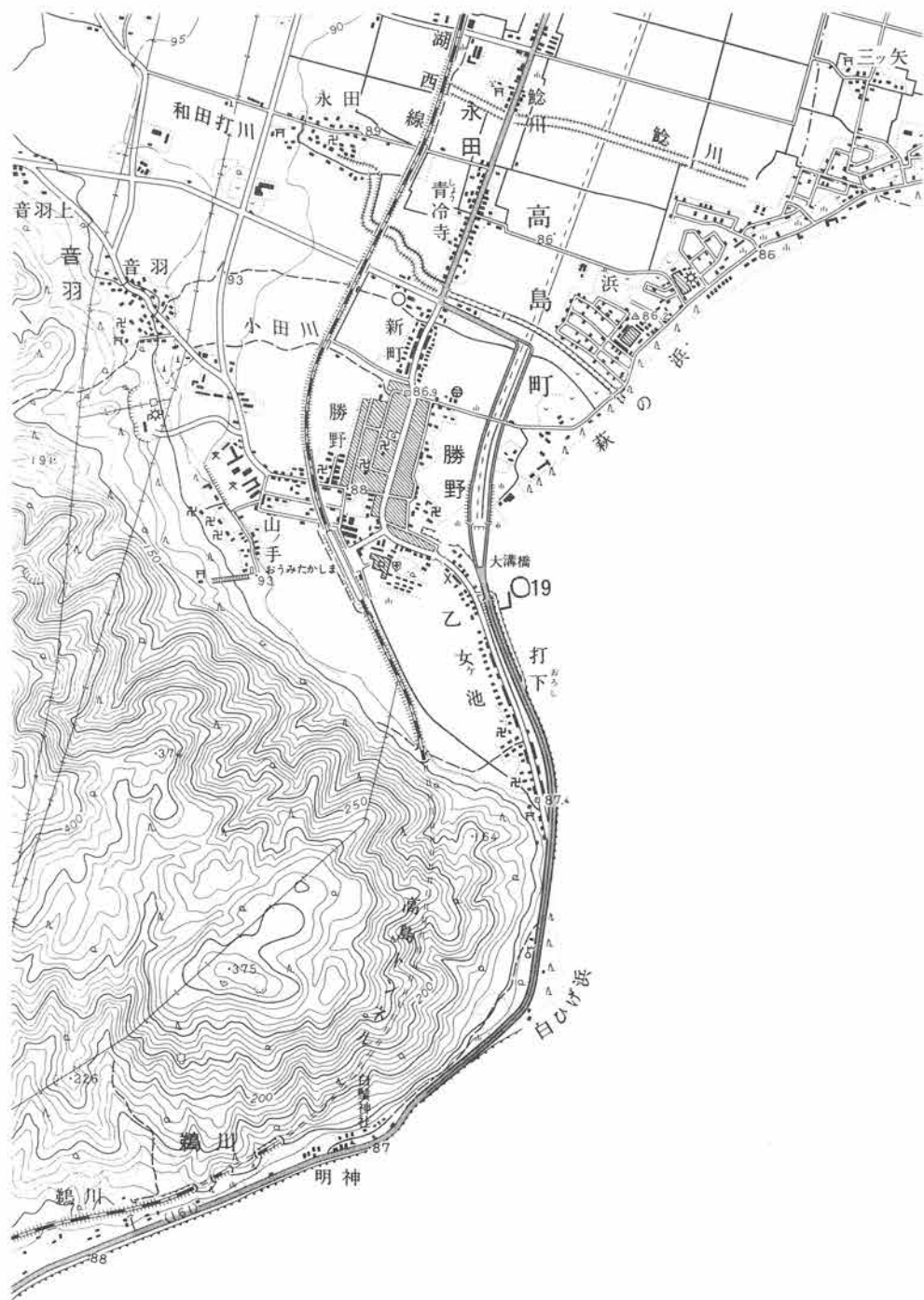


図7 調査地点位置図(19)

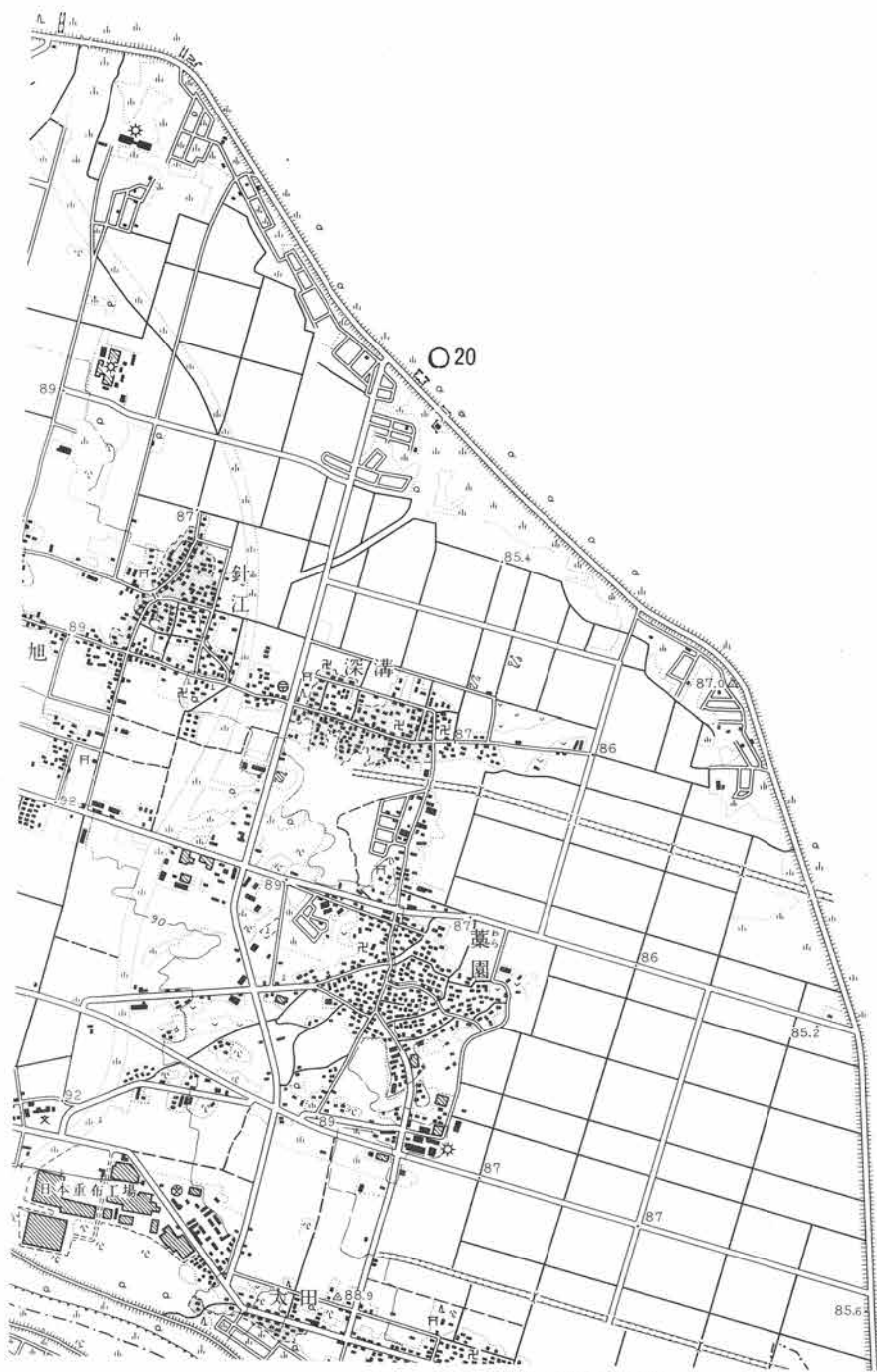


图8 調査地点位置地図 (20)

1. 今西舟溜航路浚渫 延勝寺湖底遺跡

1. はじめに

延勝寺湖底遺跡は東浅井郡湖北町今西地先に所在する。水資源開発公団による今西舟溜航路浚渫工事に伴う発掘調査で、今回で4期目にあたる。前回までの調査では、田下駄・鍬等の木製農具が溝跡から出土したため、周囲に水田跡の拡がっている可能性が考えられた。今回は溝跡の追求と水田跡との検出を目的として発掘調査が実施された。

2. 調査の経過

今回の調査地は、前回の調査地の東に隣接している。航路浚渫部分のNo.4+15m~No.5+10mまでの間の南半分45m×20m(900㎡)にトレンチを設定した。

3. 調査の結果

トレンチ内の地形は、南北に大きくのびる浅瀬の東端部分に位置しているため、東方にゆるく傾斜している。

前回までのトレンチで全面に検出されたスクモ層は、今回西端部分では湖底面下約20cmで検出されたが、トレンチ中央で切れ、東半分は傾斜が急になって砂層が拡がっている。

遺構は西半分のスクモ層を切り込んで検出された。トレンチ内の北端で東西方向に流れる溝は、大・小2条確認されている。SD1は長さ30m以上、幅は最大で6.5m、深さは0.4mを測る。SD2は長さ10.2m以上、幅1m、深さ0.25mを測る。溝は、大・小ともにトレンチ中央で消滅している。遺物は溝の埋土中より弥生時代中期の壺・甕等が、包含層より縄文時代か

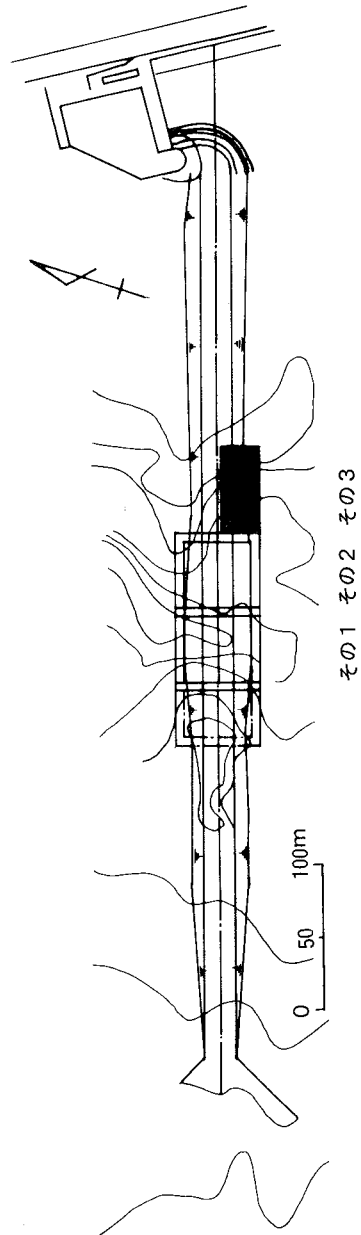


図9 今西舟溜航路浚渫トレンチ位置図

ら平安時代の土器や木器が出土している。

4. お わ り に

今回の調査で目的としていた2つのうち、溝の追求は、トレンチ中央で、地形の傾きとともに消滅していた。この溝は東方の谷あいへの排水に利用されたものであろう。もう1つの水田跡の検出は、平面及び断面の調査では確認できなかった。また、イネの花粉検出量は水田跡と決定するまでには至っていない。

しかし、包含層より出土した木器には、田下駄などの農具が見出されることから、この浅瀬が陸化していた時期、恐らく弥生時代中期頃には水田に利用されていたものと考えられる。
(三宅 弘)

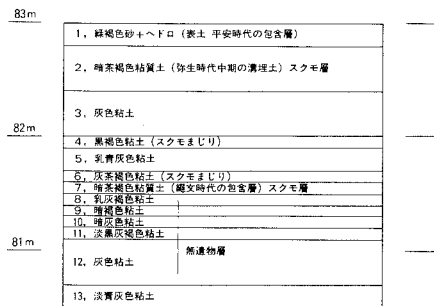


図10 今西舟溜航路浚渫 土層図

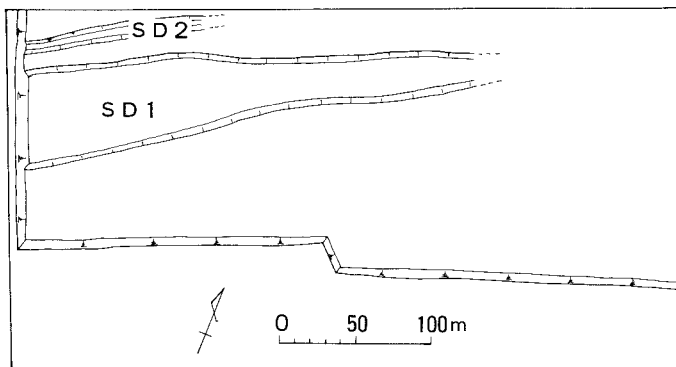


図11 今西舟溜航路浚渫平面実測図

2. 延勝寺・海老江舟溜航路浚渫(1) 延勝寺湖底遺跡

1. はじめに

調査対象地は、東浅井郡湖北町延勝寺地先の湖底に立地している。付近の湖岸一帯は浅い地形であり、かつては陸地として生活が営まれていたことが調査地北側の今西舟溜航路浚渫に係る発掘調査で明かとなっており、縄文時代中期の生活面及び弥生時代中期の農耕関係遺構等が検出されている。今回の調査は試掘調査の結果に基づき、沖合 約600mの所の浚渫予定地を鋼矢板囲いによる陸化調査を実施することとした。

2. 調査の結果

湖底面は北東から南西にかけて緩やかに傾斜し全面が砂層となっている。この砂層は浚渫計画高までの約1.2m全層にわたる。砂層は15°～20°の斜度をもつ斜層理と呼ばれる堆積を示し、基本的には一つの層理と考えるものである。斜層理は水流によって運ばれてきた砂粒が流れの方向に次々と斜面をつくりながら堆積したものであるが、この堆積方向を観察することにより古水流の方向を探ることができる。調査地では、新・旧2方向の流れを確認し、古い段階では西北西から、新しい段階ではほぼ西の方向からの流れが認められる。この運ばれてきた砂の中には比較的濃密な遺物の包含が見られ、縄文時代から平安時代までの遺物を検出した。この砂層の下層は粘質土層となっている。

3. おわりに

今回の調査は全層が2次堆積による包含層であり、いわゆる遺構面は検出できなかったのであるが下層に粘土層を検出しこれが北西方向に立ち上り、微高地を形成しているものと考えられ、この上に遺跡が乗っている可能性が高いものと思われる。

(横田洋三)

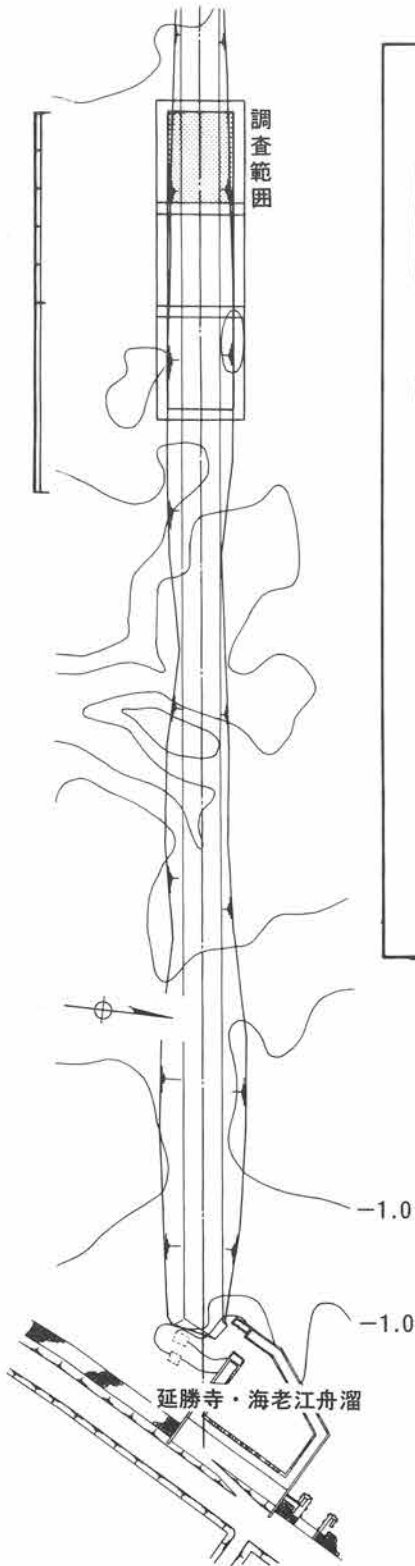


図12 延勝寺・海老江舟溜航路浚渫(1)
トレンチ位置図

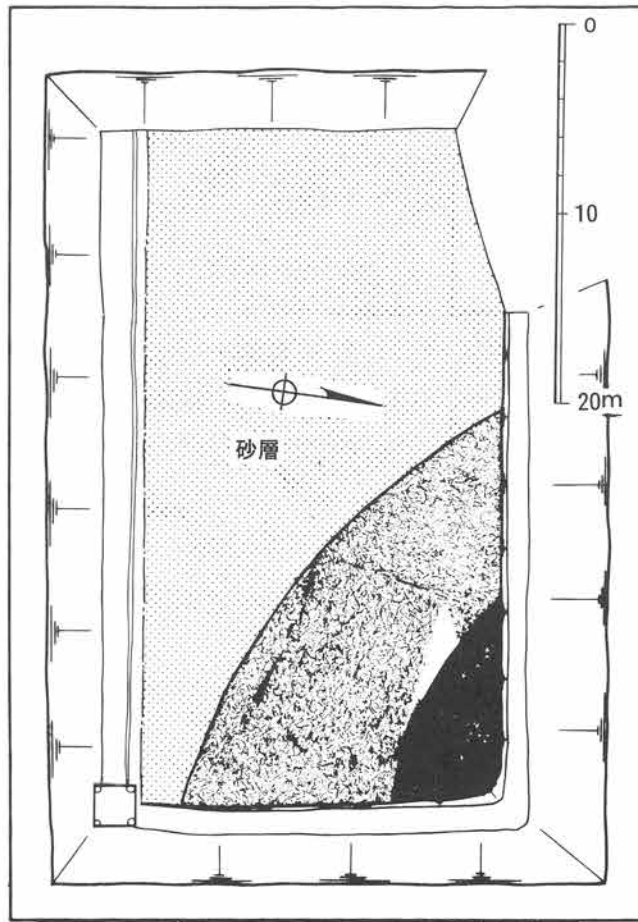


図13 延勝寺・海老江舟溜航路浚渫(1)
調査区全体図

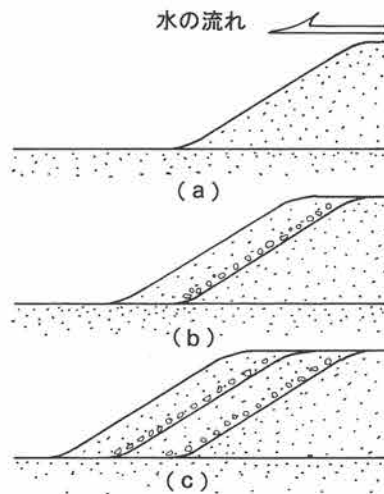


図14 延勝寺・海老江舟溜航路浚渫(1)
斜層理のできた

3. 湖岸堤新守山川その4 小津浜遺跡

1. はじめに

本調査区は、守山市杉江町地先に位置し、天神川河口部から新守山川河口部の間にあたる。

昭和59・60年度に実施した天神川水門部の調査（赤野井湾遺跡）では、弥生時代後期～古墳時代の流路、古墳時代の足跡群が検出され、それに伴って多量の土器と木製品が出土している。また、白鳳期の瓦と多量の木製品も確認されている。

赤野井湾内でも浚渫工事に伴う調査が実施されており（昭和61・62年度、赤野井湾遺跡）縄文時代早期末の遺構・遺物、中期の遺物包含層を確認している。

昭和62年度には新守山川改修工事に伴う調査が実施され（小津浜遺跡）、弥生時代前期～中期を中心とする遺構（ピット・土壌・方形周溝墓）・遺物、縄文～平安時代の自然流路が検出されている。

今回の調査地はこれらの遺跡に隣接した地点にあたることから過去の調査を補充する結果の得られることが期待されていた。

2. 調査の経過

調査は、天神川側（A区）と新守山川側（B区）とに区分し、湖岸堤道路計画部分を鋼矢板囲いの後、周囲に排水用の有孔管を埋設して実施した。まず、矢板内の表土掘削を重

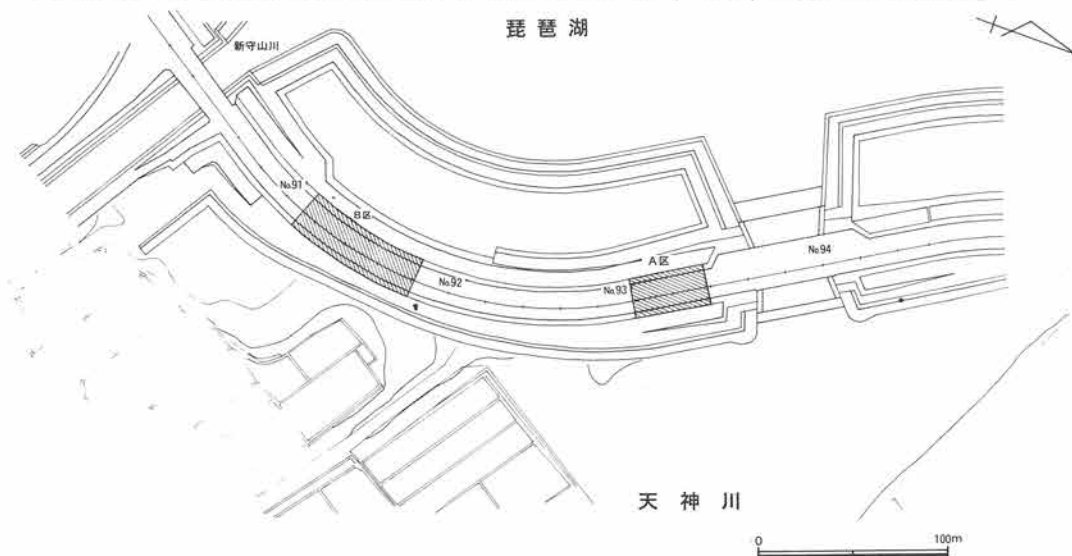


図15 湖岸堤新守山川その4 トレンチ位置図

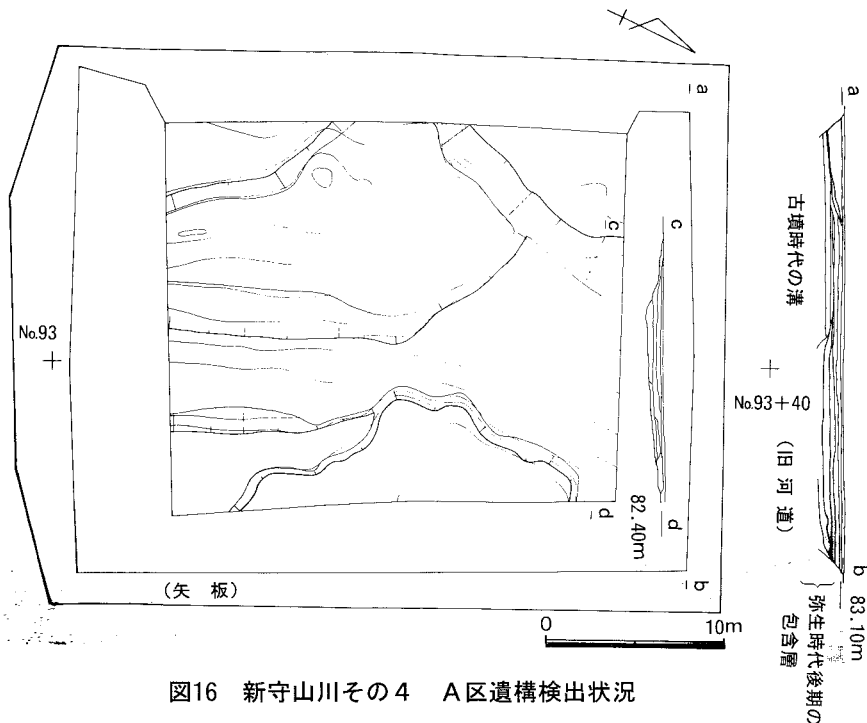


図16 新守山川その4 A区遺構検出状況

機により実施し、以下の遺物包含層の掘り下げ・遺構面精査は人力によって行ない、遺構図・土層図を作成し写真による記録化を行なった。

3. 調査の結果

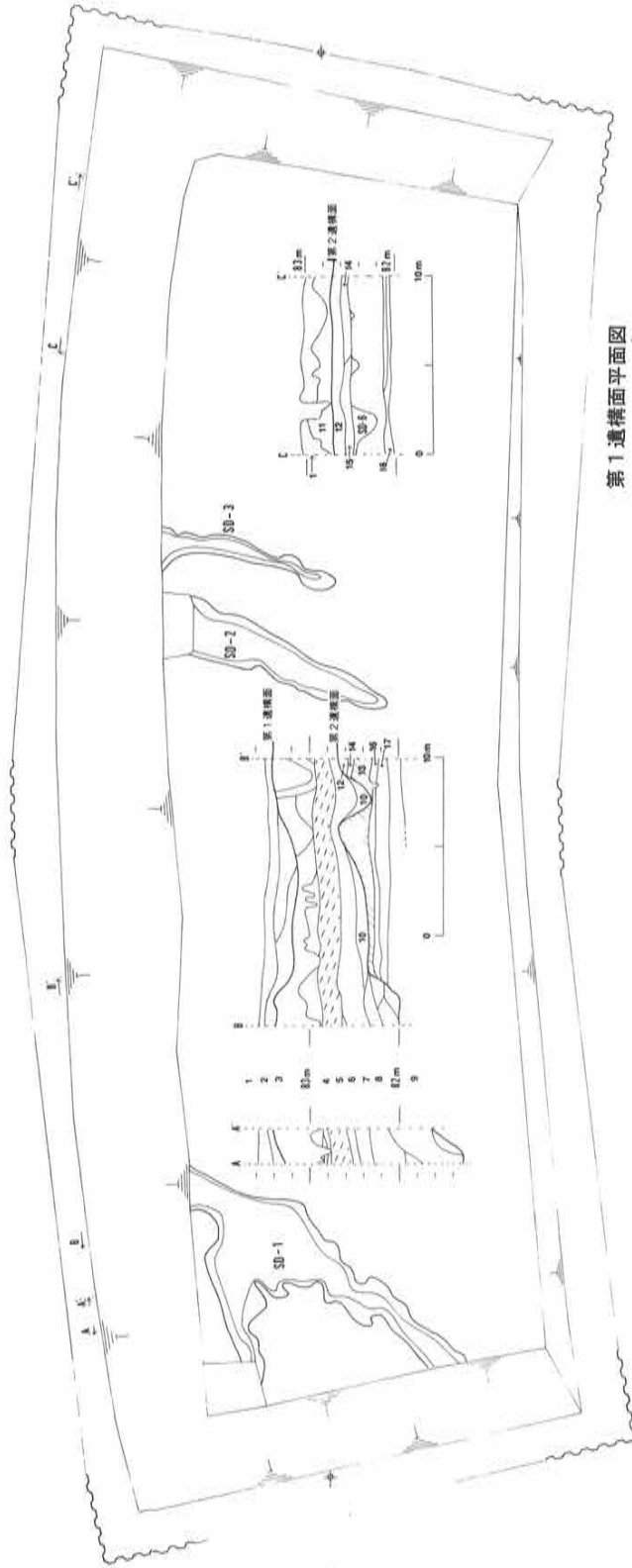
A 区

湖底面には数cmのヘドロが堆積し、その下層に灰色砂層がひろがり、砂層内には弥生土器・須恵器・土師器・黒色土器・土鍾・瓦類の小破片が混在している。

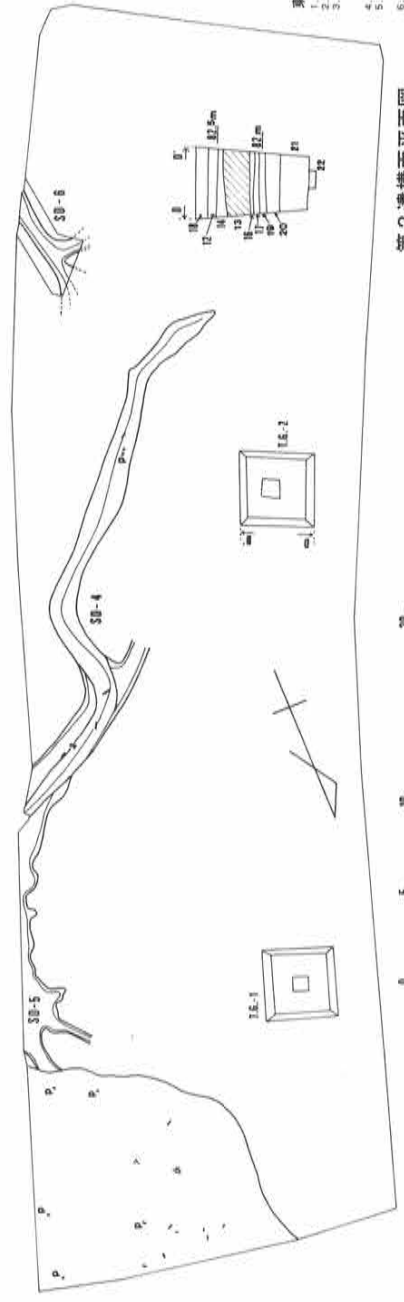
この砂層を掘り下げると厚さ0.3~0.4mの淡褐色砂混じりの黒褐色粘質土が水平堆積し、弥生時代後期の土器・木製品が多量に包含されている。木製品の残存状況は比較的良好で鍬（広鍬・狭鍬）・鋤とその柄、竪杵、臼、槽、櫛等があり、その他にも用途不明品ではあるが加工痕の認められるものが200点以上ある。なお、包含層下には部分的ではあるが足跡が検出されている。

調査区西隅ではこの包含層上面から切りこむ古墳時代の遺物を含む溝状遺構の一部が検出されている。

さらにこの包含層を除去すると暗灰褐色粘質土・淡青灰色粘土をベースに暗茶褐色粘質土（褐色土がまだら状に混じる）を埋土とする旧河道が北から南方向へのびることが判明



第1遺構平面図



第2遺構平面図

発掘面土層

- 1. 浮城跡層
- 2. 浮城跡層
- 3. 浮城跡層
- 4. 浮城跡層
- 5. 浮城跡層
- 6. 浮城跡層
- 7. 浮城跡層
- 8. 浮城跡層
- 9. 浮城跡層
- 10. 浮城跡層
- 11. 浮城跡層
- 12. 浮城跡層
- 13. 浮城跡層
- 14. 浮城跡層
- 15. 浮城跡層
- 16. 浮城跡層
- 17. 浮城跡層
- 18. 浮城跡層
- 19. 浮城跡層
- 20. 浮城跡層
- 21. 浮城跡層
- 22. 浮城跡層

- 12. 浮城跡層
- 13. 浮城跡層
- 14. 浮城跡層
- 15. 浮城跡層
- 16. 浮城跡層
- 17. 浮城跡層
- 18. 浮城跡層
- 19. 浮城跡層
- 20. 浮城跡層
- 21. 浮城跡層
- 22. 浮城跡層

図17 湖岸堤新守山川その4 B区遺構検出状況

した（標高82.40m）。幅は20m余りで深さが北側で1m余り、最深部の南側では2mにもおよび、遺物は少量であるが弥生時代中期前半の土器と木製品（鋤類が目立つ）が検出されている。

（吉田秀則）

B 区

上下2面にわたって遺構面が確認できた。湖底のヘドロ下に灰褐色砂層が薄く堆積しており、この砂層内から古代末～中世初めの土器類が検出された。この砂層を排除すると黒褐色土層があり、それを侵食した自然流路が3本検出された（標高83.4m付近、SD1～3）。SD1は深さ0.1mで黒色土器椀等が出土しており、残存状況は良好である。SD2・3は磨滅の著しい土器の小破片が多量に出土した。

下層の第二遺構面は、標高82.7m付近にあり、トレンチ東北角に大溝と中央部で自然流路（SD4・5）を検出した。大溝は東北角を中心に四半円形状に確認され、深さは1.2mあり、溝内からは少量の弥生時代中期の土器と約100点の木製品（鍬・鋤類）が出土した。SD4は西南から東北へ流れる流路で深さ0.4m、土器と木製品が出土している。

なお、さらに下層の確認のためトレンチを3個所にわたって設定したが、淡青灰色粘土と黒褐色粘土が水平堆積するのみで遺物は確認できなかった。

（造酒 豊）

4. ま と め

今回の調査では弥生～平安時代の遺物を含む砂層、古墳時代の溝状遺構、弥生時代後期後半の遺物包含層、弥生時代中期前半の旧河道が検出され、土器の他に多量の木製品が保存されていることが判明した。先にも述べた過去の周辺の調査においても同時期の遺物・遺構が確認できており、これらの調査結果から類推すると、この一帯は弥生時代～古墳時代にわたり旧野洲川の支流とでもいふべき流路がいく筋も琵琶湖へ流入していたと思われ近接した上流の微高地に集落が形成されていたと考えられる。

4. 湖岸堤赤野井南その2 赤野井湾遺跡

1. はじめに

本調査区は、守山市赤野井町地先にあたり天神川河口部に位置し、新守山川その4工区のA・B区の間にはさまれ部分である。A・B区で検出できた流路や遺物包含層のつながりを解明することが期待されていた。

2. 調査の経過

調査はNo.91+80からNo.93までの全長 約120mの湖岸堤道路計画部分を鋼矢板囲いの後、周囲に排水用の有孔管を埋設して実施した。まず、矢板内の表土掘削を重機によって実施し、以下の遺物包含層の掘り下げ、遺構面精査は人力によって行ない、遺構図・土層図を作成し、写真による記録化を行なった。

3. 調査の結果

調査は北側より開始し、新守山川その4工区A区の調査結果に基づき、砂の包含層の検出につとめた。その結果、全体に薄くヘドロが堆積しているが、これを除去すると灰色砂層が広がり、須恵器・土師器・黒色土器の細片が包含されている。ただ、No.92+80およびNo.92+40周辺は現代の旧航路にあたり大きく削平をうけていることが明らかとなった。

灰色砂層下には、弥生時代後期の遺物包含層（淡褐色砂混じりの黒褐色粘質土）が水平堆積するが、確認できたのはNo.92+60からNo.93までの間のみであった。土器の他に鋤・鍬・竪杵・槽・櫂等の木製品が多量に含まれている。

この包含層下には新守山川その4工区A区で検出された旧河道に接続する旧河道1が確認でき、ほぼ北から南へのびている。遺物は極少量であるが、弥生時代中期の土器が散見される。

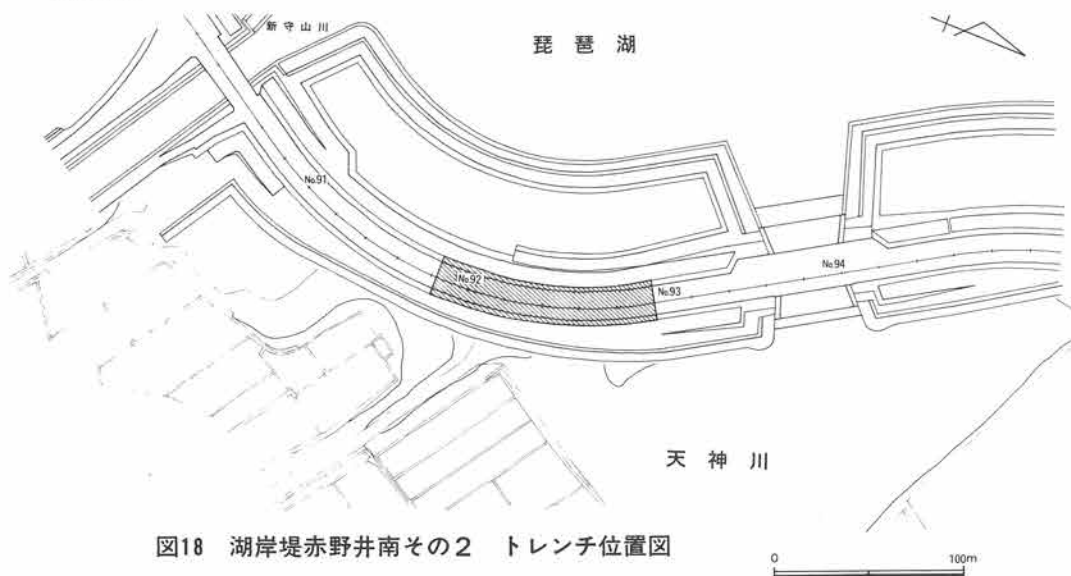


図18 湖岸堤赤野井南その2 トレンチ位置図

No.92+40より南半部については、旧航路による攪乱のためか包含層はほとんど確認されず、黒褐色粘土が全体に広がり、部分的に南東から北西へのびる帯状の灰色粗砂が粘土の上面に堆積している（図19の斑点部分）。これらは幅20m余りの旧河道2であり、灰色粗砂内には弥生時代後期～古墳時代前半頃の土器が多量に含まれている。旧河道2の埋土は黒褐色粘土下に暗茶灰褐色粘土、灰色細砂が厚く堆積し、最深部は2m余りにもおよぶ。遺物は暗茶灰褐色粘土内に少量の弥生土器と加工木が含まれるのみで、その他の層内にはほとんど認められない。この旧河道2は新守山川その4工区B区の北端で検出されていた大溝につながるものである。

5. おわりに

今回の調査では新守山川その4工区のA区とB区との遺構のつながりを押えることができ、過去の天神川水門部の調査結果を補充することができた。ただ今回検出された旧河道1と旧河道2とは埋土の違いや出土土器の時期差から判断してそれぞれ別の河道であると思われる。（吉田秀則）

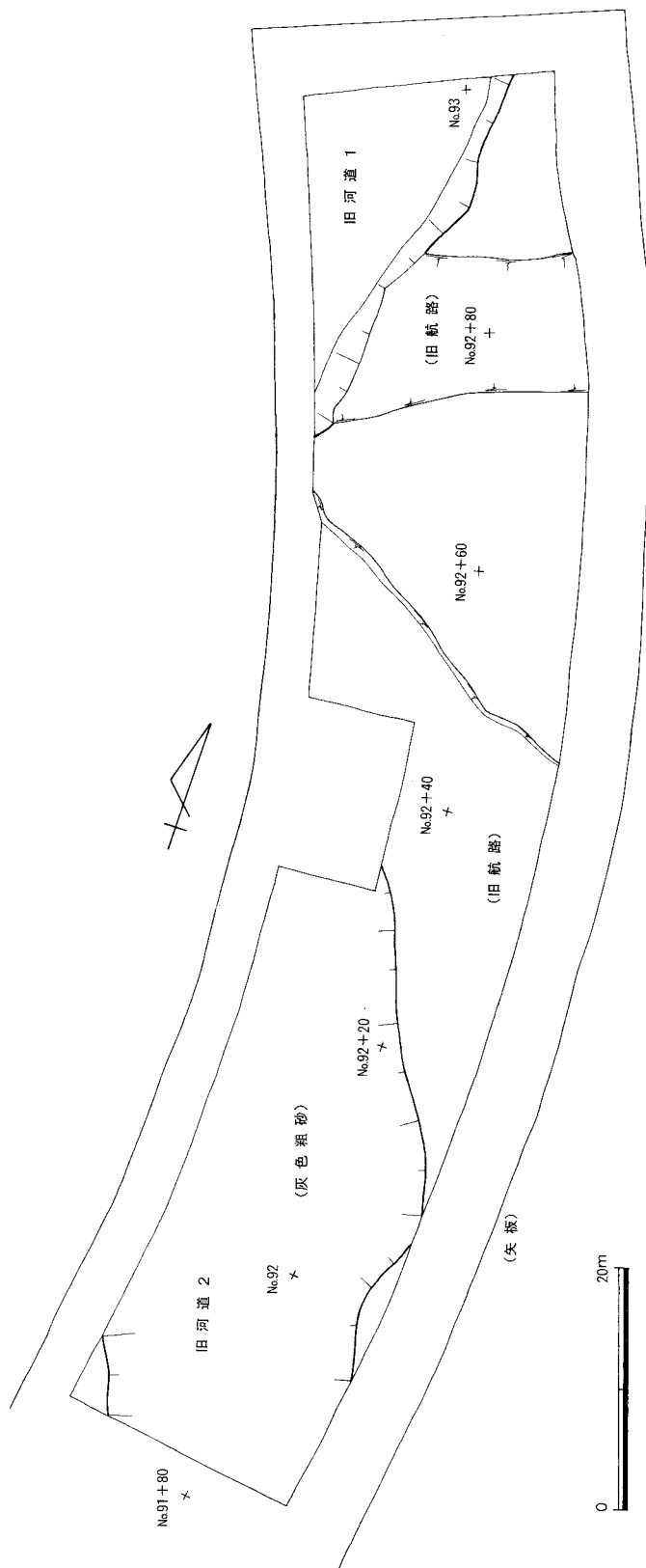


図19 湖岸堤赤野井南その2 遺構検出状況

5. 湖岸堤赤野井北その1 赤野井湾遺跡

1. はじめに

本調査は守山市赤野井町地先、湖岸堤赤野井北その1工区に伴い、昨年度試掘調査で遺物の検出をみた最北のT26～T28の3地点を含めた工事用センター杭No.110からNo.111+20mまでの約2,600㎡を対象とした。現況は湖岸汀線にほぼ重なる湖中で、調査は鋼矢板で締切り、最上面の遺物包含層までの無遺物層を重機で除去した後、人力による包含層精査から始められた。

2. 調査の結果

本調査により得られた新しい知見は、弥生時代前期から中期および縄文時代晩期の時代差をもつ上下の遺物包含層が確認されたことである。上層の遺物包含層は、湖底面下の無遺物層の暗青灰色シルト・青灰色粘土層下にほぼ水平に堆積した暗赤褐色砂層と、湖中に向かって堆積の厚を増していく淡黄褐色砂層の2層が検出された。暗赤褐色砂層は上面に貝殻を含み、淡黄褐色砂層とともに弥生時代前期から中期にかかる土器類を大量に包含し、完形の石鏃を含めた石器類も出土した。遺物は調査地全体に散布し、磨滅を受けている。

下層包含量は上層下部と同様に湖岸から湖中へ傾斜する堆積状況を示す黒灰色粘質土層で、晩期縄文土器のみを出土する。その量は上層に比べてきわめて少量であるが、磨滅はほとんど受けておらず、大形の破片が数箇所点に点在する状況で出土した。したがって下部に遺構の存在が期待されたが、直下の青灰色粗砂層が軟弱で、下層包含層からの凹凸は認められたものの、遺構と判断するには至らなかった。

3. おわりに

今回の調査で、遺構は発見されなかったものの、2層の遺物包含層の検出により、上層については本来の位置が内陸部に想定され、下層についてはさらに湖中部への遺物分布の拡がり予想される。また赤野井湾遺跡の北限を考える上でも本調査の資料の存在が有益なものとなる。

(芝池信幸)

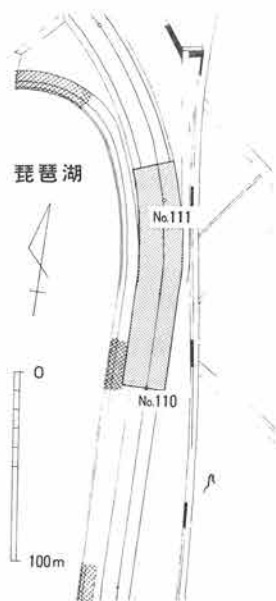


図20 赤野井北その1
トレンチ位置図

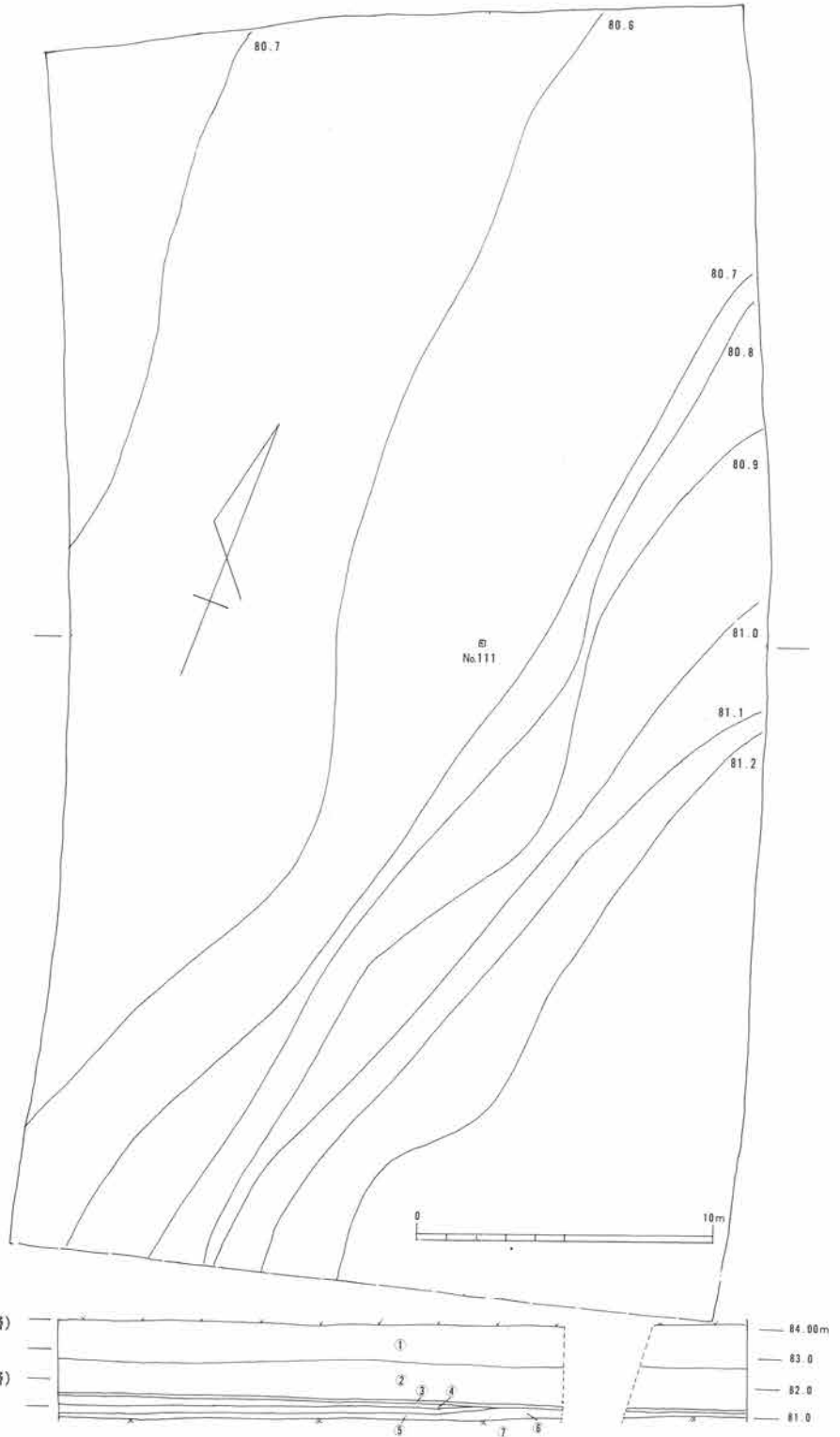


図21 赤野井北その1 調査区(北区)地形および土層断面図

6. 常盤農水 烏丸崎遺跡

1. はじめに

本調査は、草津市下物町常盤地区農業用水路および揚水機場建設工事に伴い、昨年度試掘調査の結果、遺構・遺物の検出により全面調査となったものである。調査地は送水管および吸水管理設部分と揚水機場の各々の予定地で、工事掘削にかかる最大の範囲を対象とし、北からT1～T7のトレンチが設定できた。

2. 調査の結果

基本層位は、①表土（耕土）約15cm、②床土（黄灰色粘土）約5cm、③灰色粘土約20cm、④青灰色粘土約30cmで、遺物包含量は③と④の間に淡暗灰色粘質土としてはいい、遺構は④を切り込んでいた。

遺物包含層はT3・T4・T6で検出され、ともに厚さ10～20cmの淡暗灰色粘質土であるが、T4・T6に多量の古墳時代後期に相当する土師器・須恵器が出土した。

遺構は、T2で溝1条、T3で溝2条、T4で溝1条・土塋3基、T6で溝4条・土塋4基、T7で溝1条の検出があった。年代の判明している遺構は、T4の古墳時代前期の溝・土塋、T6の古墳時代後期の土塋があり、T6の溝4条は南部の2条が古墳時代後期、北部の1条が縄文時代晩期、中間の1条は不明ながら比較的新しいと考えられる。

遺構の規模・構造については、T6以外のトレンチが送水管・吸水管理設予定地で工事掘削最大幅2mに相応させたもので、その内容はとうていつかみきれないものの、若干の性格づけが可能である。溝は幅約1m、深さ約40cmを測る掘り込みの鋭いものがT2・T3で検出され、その他に幅50cm、深さ20cmまでのものがT3・T4・T6・T7で検出さ

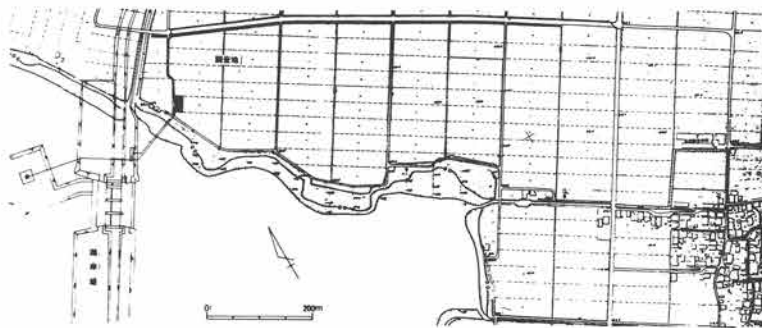


図22 常盤農水 トレンチ位置図

れ、そのうちT 6の1条のみが幅2 mで晩期縄文土器の細片が少量出土した。溝内から出土した遺物は全体においても少ないが、直上の古墳時代後期の包含層の遺物を含んでいるものが多く、上層との時代差を確定できるものはない。T 2・T 3の溝には遺物の出土はないものの、方形周溝墓の周溝部の可能性が考えられる。土壌はT 4の3基が径約30cm前後の不定形で、1基のみが深さ1 mを測り、多量の古墳時代前期の遺物が出土した。

3. お わ り に

遺物・遺構の検出をみなかったT 5においては全面砂礫土で、層序的には古墳時代の遺跡はその上に成り立つ。T 2・T 3の溝が方形周溝墓のそれであると考え、墓域の南限と後代の集落跡が近在するという本遺跡の一端が示されて注目される。

(芝池信幸)

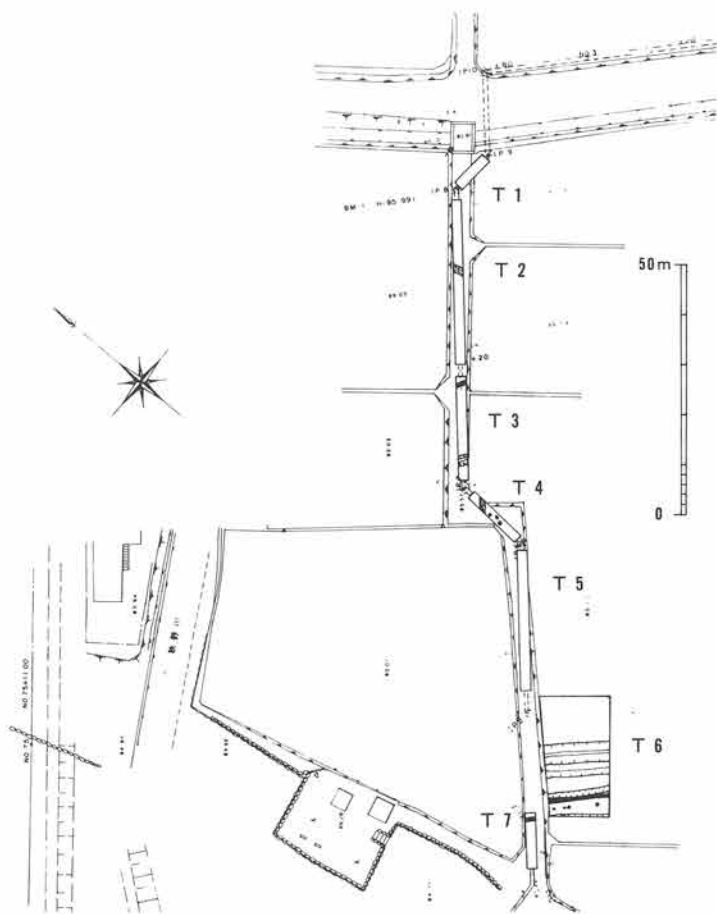


図23 常盤農水 トレンチ配置および遺構図

7. 湖岸堤津田江その1(3・4) 津田江湖底遺跡

1. はじめに

本調査は湖岸堤津田江その1(3・4)工区建設に先立つものであり、湖岸堤工事用ポイントNo.65～No.66間の全長100mを調査対象地として実施した。調査区の幅は約30mである。なお、No.65以南の地区は昭和61年度に志那北その2工区として発掘調査が完了している。

2. 調査の経過

No.65+50m以北を津田江その1(3)区、以南を1(4)区と称し、1(3)区より順に調査を実施した。両区ともに③層までの無遺物層はバックホーを用いて除去した。志那北その2工区で検出された弥生時代以降の遺構・遺物は今回の調査区には及んでいなかった。④層は62年度調査の津田江その1-1工区でみられた縄文時代後期の遺物包含層に対応すると考えられるため、これ以下の土層を精査した。なお、1(4)区については株式会社パレオ・ラボに委託して花粉珪藻分析を実施した。試料採取地点は図25のA～Cである。

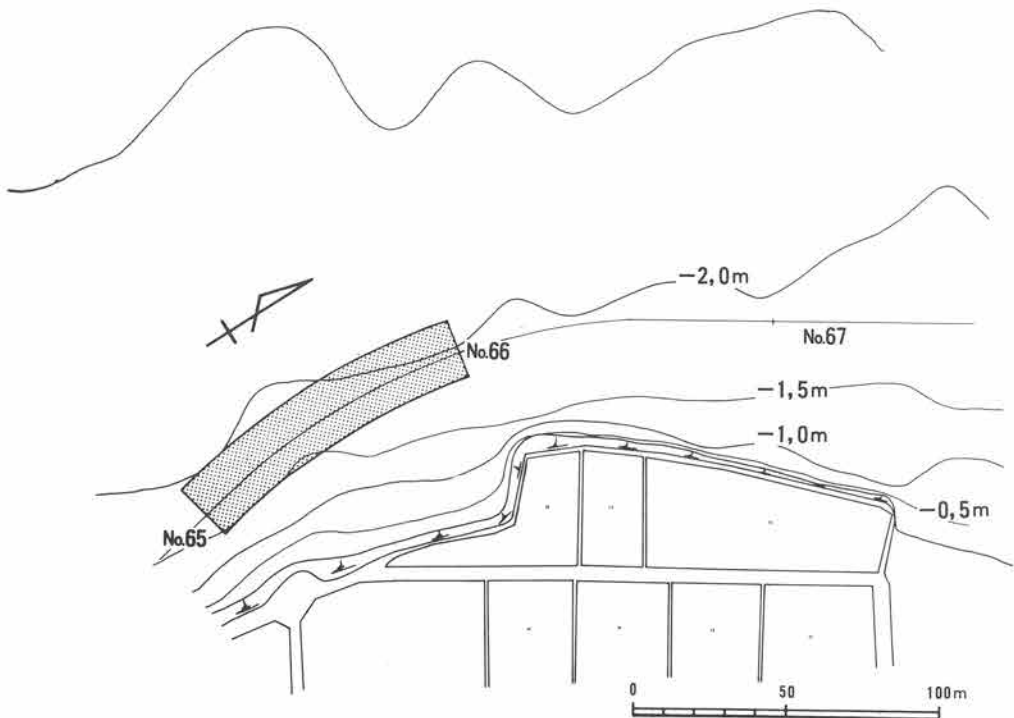


図24 湖岸堤津田江その1(3・4) トレンチ位置図

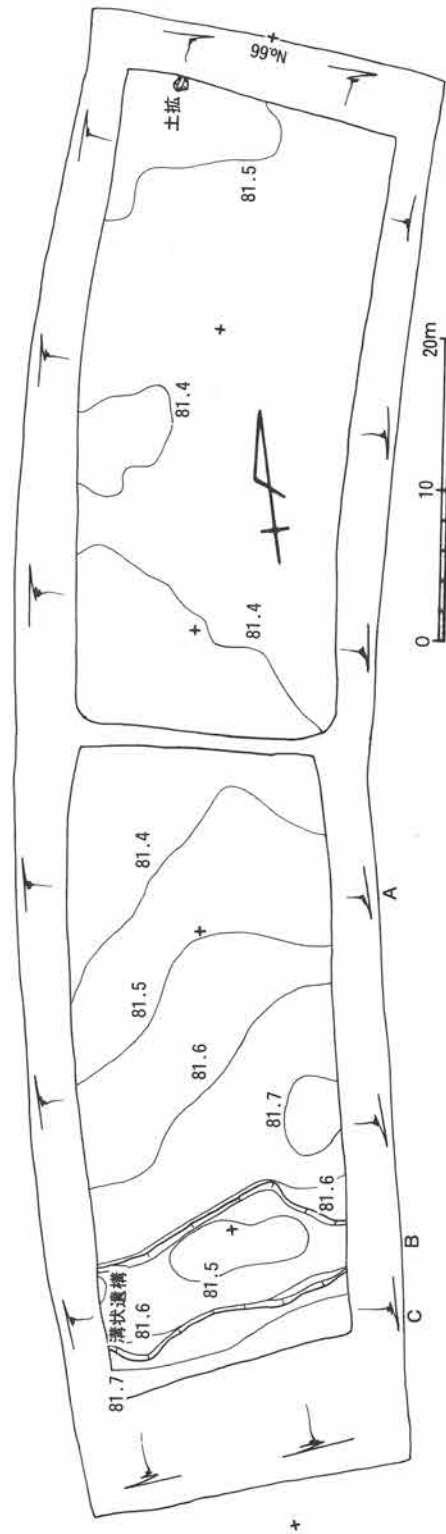
3. 調査の結果

調査区の土層は南から北へゆるやかに下るが、北端部においては逆にわずかに上昇に転じている。④層の灰茶色泥炭が遺物包含層であり、縄文時代後期の土器・石器が散在的に出土した。石器では石錘が2点みられる。

④層を除去した面において溝状遺構と不整形土壇が検出された。土壇は直径約1mであり、土壇内より土器片が十数点出土している。溝状遺構内でも土器片がややまとまって出土した。溝状遺構は幅6m、深さ15cmをはかる。珪藻分析の結果によると溝状遺構の埋土からは河川に生育する種の珪藻はみられなかった。

4. おわりに

本調査区においては遺物の出土は散在的であり、津田江湖底遺跡の南限を示すものとして大過ない。今後土壌試料の¹⁴C年代測定を行うことにより、花粉・珪藻分析から得られた環境変遷に実年代を与えれば、津田江湖底遺跡の形成過程をより明らかにすることが可能となる。



トレンチ全体図

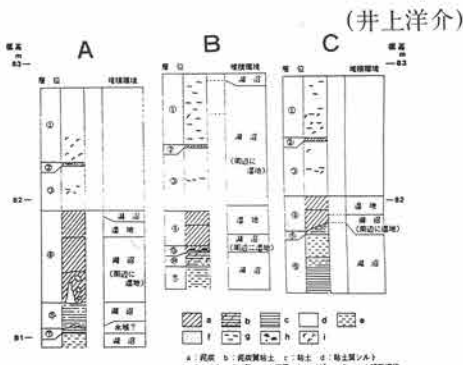


図25 湖岸堤津田江 その1(3・4)土質柱状図及び堆積環境変遷図(珪藻分析による)

8 湖岸堤下物その2(E)・(F) 烏丸崎遺跡

1. はじめに

烏丸崎遺跡は、琵琶湖南湖に突出する烏丸半島に立地する。昭和59年以降の調査で遺跡の範囲および内容についての概要が判明してきた。それによると、半島の先端部には、弥生時代中期前半の方形周溝墓とともに2ヶ所の玉作工房が検出され、数千点もの玉作関連遺物が出土した。方形周溝墓群は、半島の軸線に沿って造営されており、今回の調査区である半島付根まで、長さ600m以上、幅120mの範囲に数百基が築造されていると推定している。さらに半島付根の西部では弥生時代前期の住居址や土壙が検出された他、縄文時代晩期の遺物も出土している。

2. 調査の経過

今回の調査区は、工事用基準杭No.77～No.77+50mを下物その2(E)とした。また、工事用基準杭No.75+20m～No.75+50m、No.75+90m～No.76+40mを下物その2(F)として、そのうち前者をA区、後者をB区とした。

3. 調査の結果

下物その2(E)では、上下2面の遺構を検出した。上面は平安時代末～鎌倉時代初の遺物を含む不定方向の溝数条である。下面(第2遺構面)は、平安時代後期の溝数条とともに、古墳時代前期の一直線に延びた溝一条を検出した。この溝は、昨年度の調査でも検出されており、総延長は90m以上で、東半では、20m毎に3条の直交する溝が検出された。方形周溝墓群は当調査区まで拡がらないことが確認された。

下物その2(F)では、A区の上面で、弥生時代中期前半の方形周溝墓5基、中期後半までの土壙10基、溝4条、下面で、溝1条と、その埋土を切って噴砂跡を検出した。B区では、方形周溝墓7基以上と溝、土壙を検出した。方形周溝墓の主軸方位は、調査区により若干異なっている。

(岡本武憲)

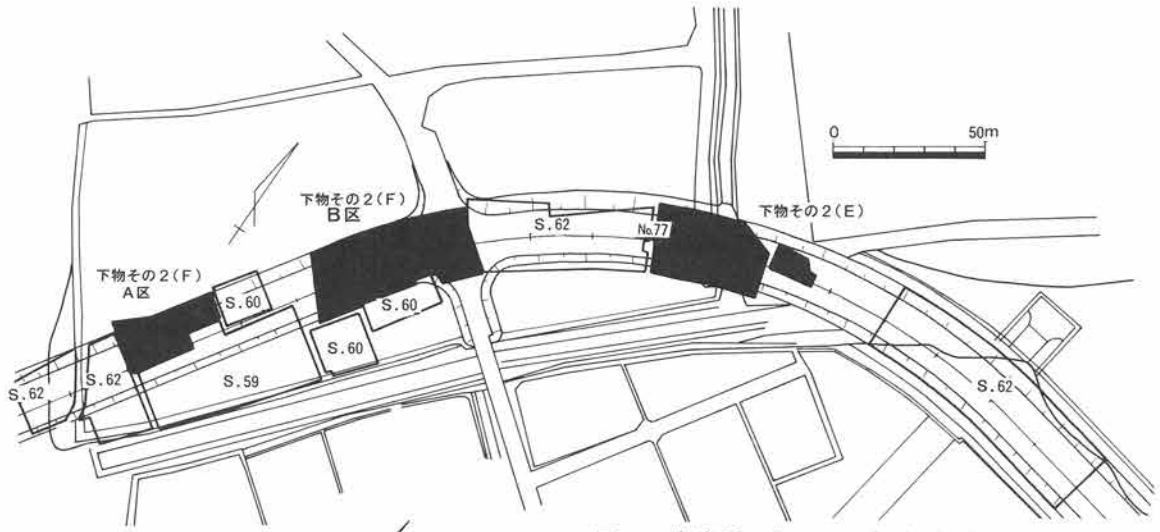


図26 湖岸堤下物その2(E)・(F)
トレンチ位置図

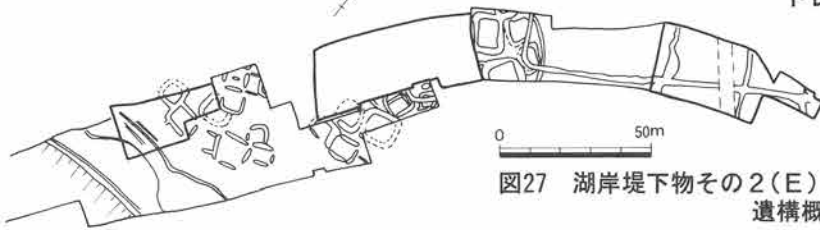


図27 湖岸堤下物その2(E)・(F)
遺構概略図

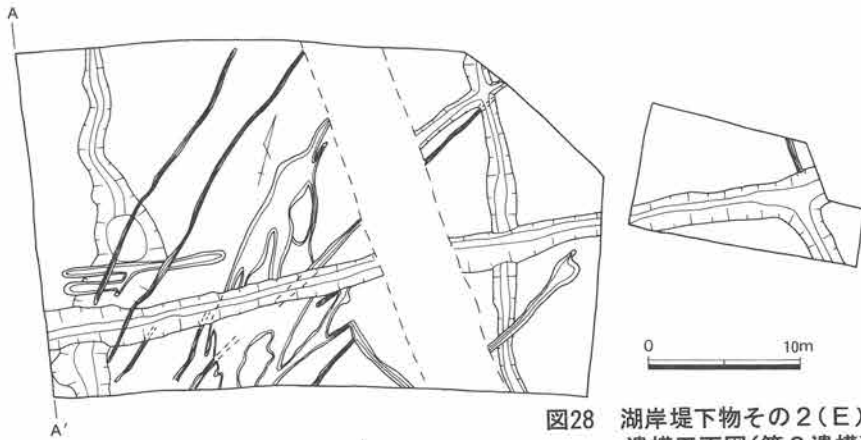


図28 湖岸堤下物その2(E)
遺構平面図(第2遺構面)



図29 湖岸堤下物その2(E)
土層断面図

9. 志那沖 志那湖底遺跡

1. はじめに

志那湖底遺跡は草津市の志那町から葉山川河口までの沖に広がる縄文～弥生時代の遺跡である。昭和7年に外縁付鈕式銅鐸が出土したのをはじめ、近年の調査では湖底から縄文時代晩期の土器棺・弥生時代中期の遺構などが検出されている。

今回の志那湖底遺跡潜水試掘調査は、遺跡の保存策を講ずるため、過去の試掘調査のデータの不足を補う目的で実施したものである。

2. 調査の経過

これまでの試掘調査の結果において、データの無い地点を選んで今回の調査地点を設定したところ、合計21ヵ所の調査地点について試掘を実施することになった。なお、このうち1ヵ所（No.20）はすでに浚渫を受けていたので、調査を行なわなかった。よって最終的には20ヵ所の調査地点について試掘調査を実施した。

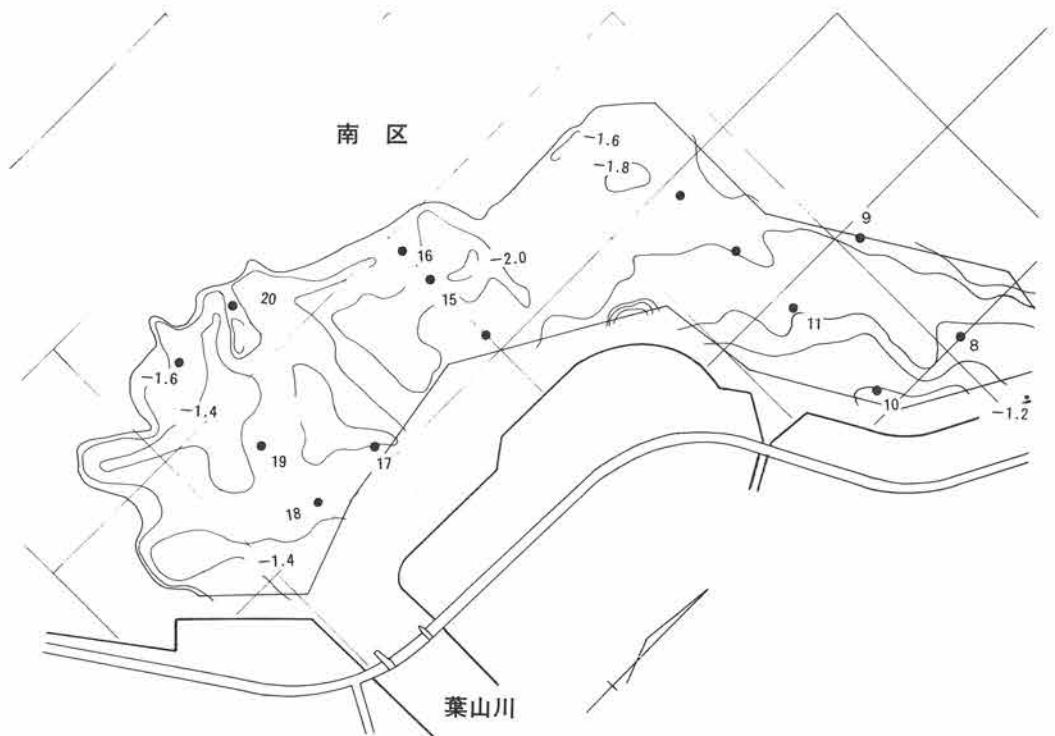


図30 志那沖 調査地点位置図

3. 調査の結果

北 区

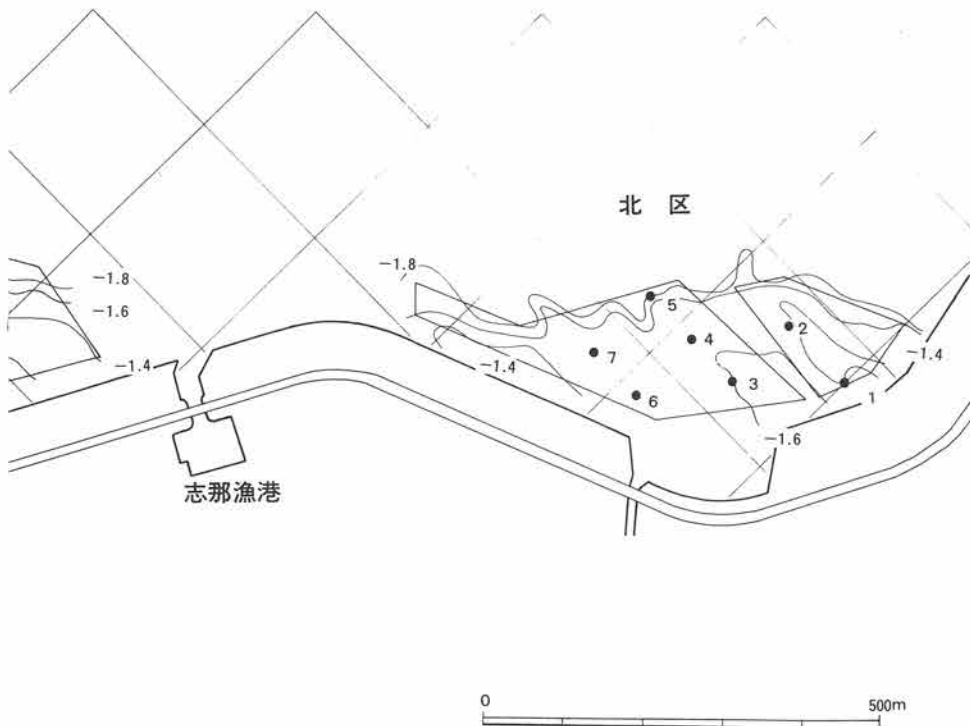
No.3～7において多量の弥生土器（前期～中期）が出土した。No.3～4ではT. P. 82.0 mより上にしっかりした粘土の包含層があり、遺構面が存在すると思われる。

南 区

2～3個から10個程度の土器が、南区全域から出土する。No.8・9・10では出土遺物の時代が新しく、量も少ない。これらの地点より南では縄文土器を中心に出土する。No.21は特に出土量が顕著である。またNo.19では遺物は出土しなかったものの、埋没林とおぼしき自然木群が検出された。

4. おわりに

今回の調査の結果は、これまでのそれと矛盾するものではない。またT. P. 82.0m以上のレベルで遺物が出土することも確認された。遺物包含量の土質は砂・粘土・シルトなどであった。
(伊庭 功)



10. 湖岸堤北山田 北山田湖底遺跡

1. はじめに

本調査は、湖岸堤管理用道路建設に伴う北山田工区試掘調査で、新設漁港北より草津川河口方向へ約600mまでの範囲を対象とした。

北山田湖底遺跡は、漁港新設に伴う昭和57年度の試掘調査によって港内に縄文時代から近世までの遺物散布が確認されたのに続き、59年度港内南部の本格的調査でまとまった近世陶磁器類の出土で港の変遷に関する一資料を得た。沖については、昭和61年度潜水試掘で上水および航路予定地点に縄文土器・弥生土器の散布が認められ、62年度の上水No.13ポイントの調査で多数の縄文土器が検出され、本遺跡の範囲が新港沖より約300m西方まで延びることが判明した。

2. 調査の経過

試掘調査は、湖岸堤工事のセンター杭No.17+37.154mから北へNo.23+40mの間に鋼矢板で囲う5m×5mのトレンチ16箇所を設定し、0.4m³級バックホーで東側に土層観察のための残土壁を設けながら慎重に掘削・排土を行った。また、掘削の進行に伴い下部に補強工を設けて、可能なかぎり深く掘削することにつとめた。トレンチは南から北へ順にT1～T16と称したが、現状で陸部となっているT10から北へT16まで調査した後、湖中部のT9から南に進んだ。湖中部については鋼矢板内への漏水が激しく、4インチ水中ポンプで常時排水を行い、漏水部分に漸次補修を加えながらの作業となった。

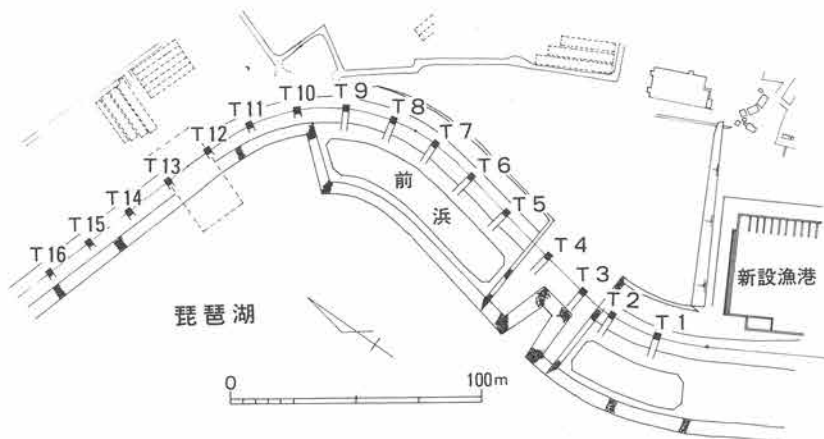


図31 湖岸堤北山田 トレンチ位置図

3. 調査の結果

遺物・遺構の検出は皆無であった。調査トレンチのすべてに青灰色粘土層ないしは砂質土層が上面に厚く堆積しており、T10・T11のみ貝殻包含層・腐葉土層が検出された。

4. おわりに

本調査地は現在の湖岸線にほぼ沿って40m間隔に試掘坑が設定されたもので、湖辺の旧状については新しい知見を得られなかったものの、漁港の変遷に関わる中世以降の遺跡は現在の湖中に向かっては分布しないことがほぼあきらかにしえたと考えられる。

(芝池信幸)

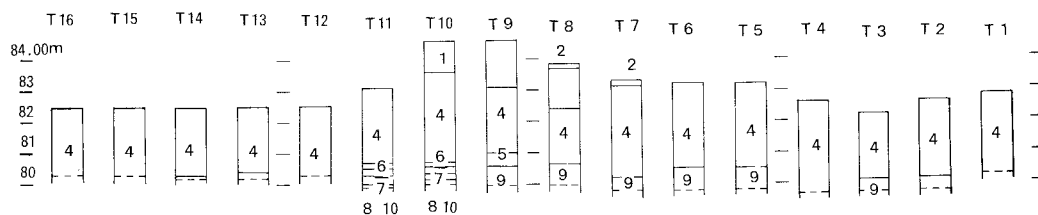


図32 湖岸堤北山田 トレンチ土層柱状図

11. 津田江給水内湖送水管 津田江湖底

1. はじめに

烏丸崎遺跡は草津市下物町地先に位置している。水資源開発公団による津田江給水・内湖送水管工事に伴う試掘調査で、今回は常盤農水から分岐する津田江内湖送水管工事部分を実施した。今回の調査地は、烏丸崎の南側の付け根にあり、津田江湾に面している。現在湖岸を中心として浅瀬・湿地を形成しているこの地は、南接する津田江湖底遺跡との接点に当り、両遺跡の境を明確にする目的で調査が実施された。

2. 調査の経過

送水管部分は、No.1 +4.65m～79.57mまでをW字状に3度屈折して延びるもので、延長474.92m、幅2.4mのものである。試掘トレンチは3m×3m(9m)のものを約30mピッチで計16箇所掘削する予定であったが、工事計画の変更に伴って14箇所に減少した。トレンチは北から順に1～14と番号をふった。

3. 調査の結果

14箇所の試掘トレンチは、1～8トレンチまでは現在陸化しており、それぞれ約2m(81.8m)まで掘り下げた。9～14トレンチは、現在湖中の浅瀬となり、表面にヘドロが堆積しているため安全面を考慮して掘り下げを約1m(82.8m)までで止めた。遺構及び遺物は全く検出されなかった。

4. おわりに

今回の調査では、遺構及び遺物は全く検出されなかった。津田江湖底遺跡では、81.8m前後で遺物包含量が検出され、湖岸堤津田江その2の調査では、83.0m以上より弥生時代前期から古墳時代の溝が検出されている。また、常盤農水の調査では84.0mで古墳時代後期の溝が検出されている。今回調査を行った地区のうち、1～3トレンチの北方や西方数十mの所では、明確な遺構が検出されているため、特に注意を払って精査したが遺物は全く発見できなかった。

(三宅 弘)

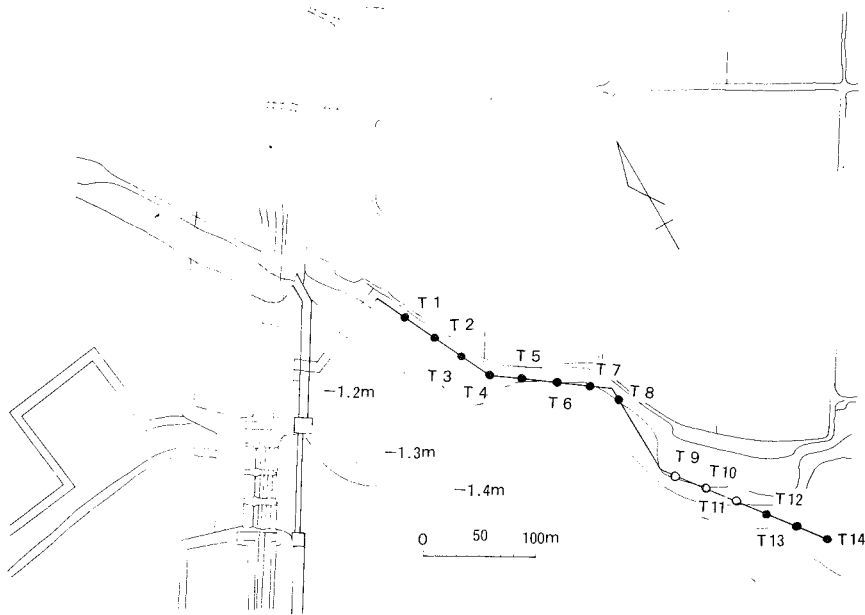


図33 津田江給水内湖送水管 試掘トレンチ位置図 (○は未調査)

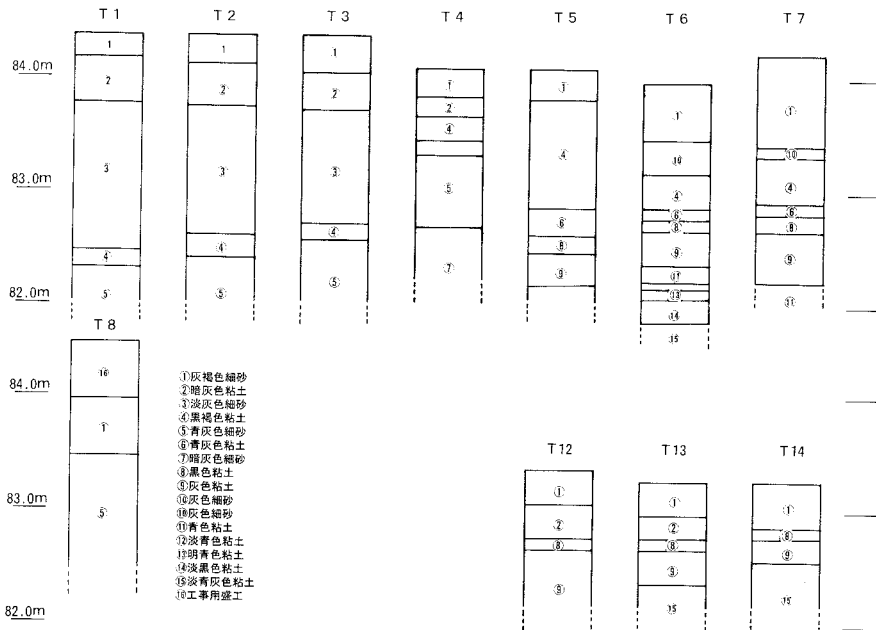


図34 津田江給水内湖送水管 土層図

12. 新草津川河川改修(1) 北萱遺跡

1. はじめに

北萱遺跡は草津市矢橋町南浜地先に位置する。当地は昭和57年度以来、滋賀県土木部の行った新草津川河川改修事業に伴って度重なる発掘調査が実施されていた。その調査成果は発掘調査概要として刊行されている。

2. 調査の経過

今回の調査地はその下流域に相当し、水資源開発公団の依頼に伴って発掘調査が行われた。当地は蛇行する北川の下流域にあるため、周囲は古くから幾度となく氾濫を受けていたと考えられる。調査前は水田化されていたが、地表面以下2mは砂とシルト粘土の互層を呈している。

トレンチは新河川計画域のNo.1 +30m～No.2 +40mまでの左岸110m×25.5m(2,805㎡)に設定された。

3. 調査の結果

遺構は表土下約80cm～90cmで検出された。灰褐色砂礫層(第4層)を切り込む褐色の細砂を埋土とする溝1条、土壇5基で、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が包含されて

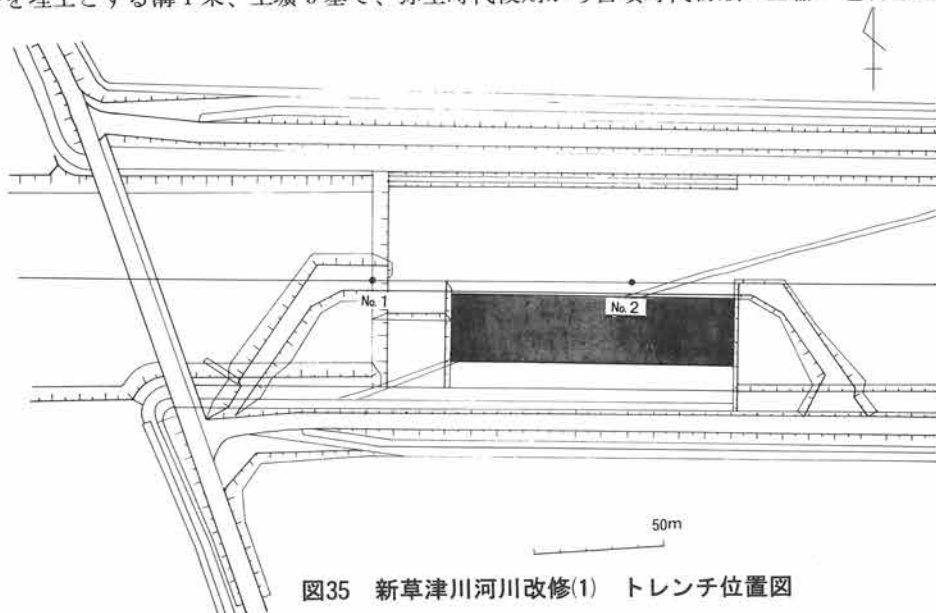


図35 新草津川河川改修(1) トレンチ位置図

いた。SD1は長さ28m、幅4m、深さ20cmを測る。土壌は1.8m～5.1m×0.9m～2.1m、深さ10cm～20cmを測るものである。また、遺物が検出された前記第4層と第5層である灰色砂礫層の直上部分に多量の遺物を含んでいる。それらは、縄文時代晩期から古墳時代前期までの土器を中心として鋤・弓などの木器・石鏃・砥石などの石器を含んでおり、上流部分で検出された結果と同様のものであった。

4. お わ り に

今回の調査では、溝1条と土壙5基が検出された。いずれも弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土しており、古墳時代前期頃に掘り込まれたものと考えられる。この結果は、上流部分の調査成果と大きく矛盾するものではない。今回は新河川計画部分の左岸分のみの調査であったため、旧河道は検出できなかったものと考えられる。また第4層下半で多量に包含されている遺物は、北川の旧河道の氾濫に原因するものであろう。

(三宅 弘)

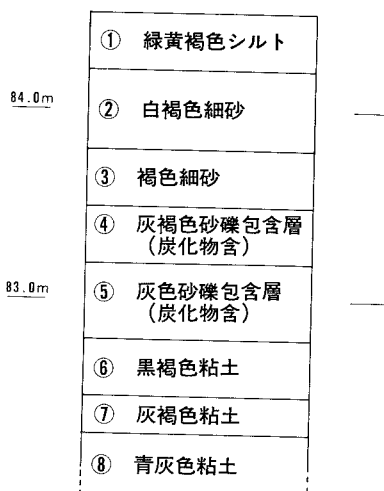


図37 新草津川河川改修(1) 土層図

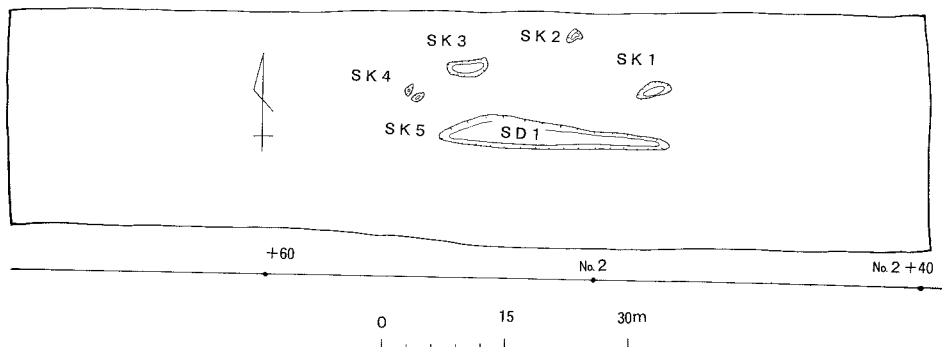


図36 新草津川河川改修(1) 平面実測図

13. 湖岸堤津田江その2(1) 津田江湖底遺跡

津田江湖底遺跡は草津市下物町に位置する。津田江湾の出入口を横切る湖岸堤管理用道路建設に伴う調査で、北水門の南にある。津田江湖底遺跡は、縄文時代早期末からの遺物が出土し、汀線や森林跡など縄文時代の生活面が検出された遺跡でもある。北に隣接する烏丸崎遺跡では、弥生時代中期の方形周溝墓を中心として、玉造り工房跡など弥生時代の生活の跡が偲ばれる遺跡である。

本調査は、北側の水門の南に位置し、No.72 + 4 m ~ 30 m までの長さ26 m、幅20 m、面積520 m²について実施された。

今年度は、重機を使用しての表土掘削及び遺構、遺物包含層の確認のみで、遺構検出作業及び遺構、遺物包含層の掘り下げ作業は来年度に実施される予定である。

(三宅 弘)

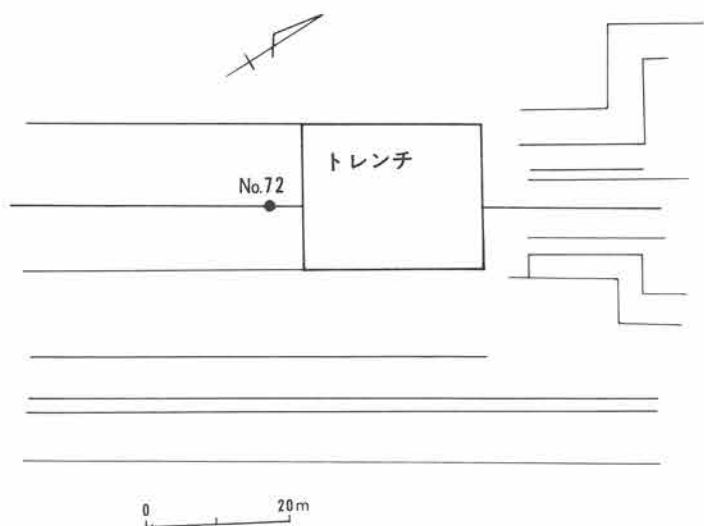


図39 湖岸堤津田江その2(1) 平面図

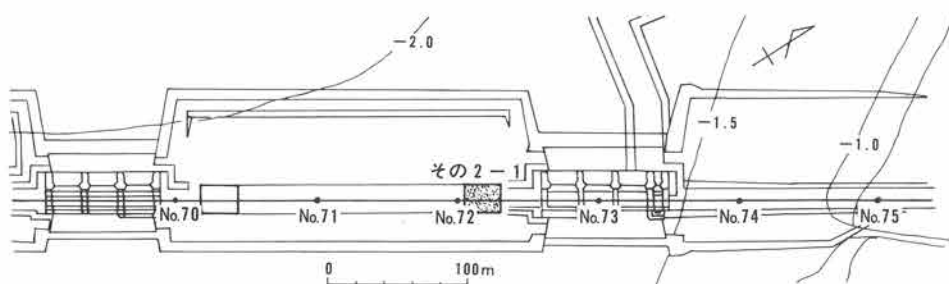


図38 湖岸堤津田江その2(1) トレンチ位置図

14. 湖岸堤津田江その1(5) 津田江湖底遺跡

津田江湖底遺跡は草津市下物町地先に位置し、津田江湾の出入口を横切る湖岸堤管理道路建設に伴う発掘調査である。前年度までの湖岸堤管理用道路や水門部分での調査成果によると、縄文時代早期末から前期にかけての森林を始めとして、弥生時代前期・中期の土壙や溝などに至るまで各時代の遺物や遺構が検出されている。

今年度の調査予定は、重機を使用しての表土掘削及び、遺構、遺物包含層の確認のみで検出掘り下げ作業は来年度の実施予定である。トレンチは、南の水門部分の北側にNo.70+18m～44mまでの26m×20m（520㎡）に設定した。表土および包含層までの土砂を0.7㎡級バック・フォーを使用して掘削を開始した。排水用側溝を掘り下げた断面観察によれば、ヘドロが上層に厚く堆積し、その下には粘土層が認められる。

(三宅 弘)

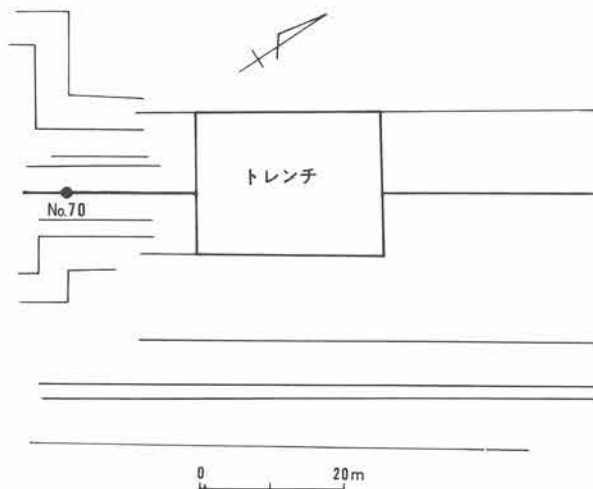


図41 湖岸堤津田江その1(5) 平面図

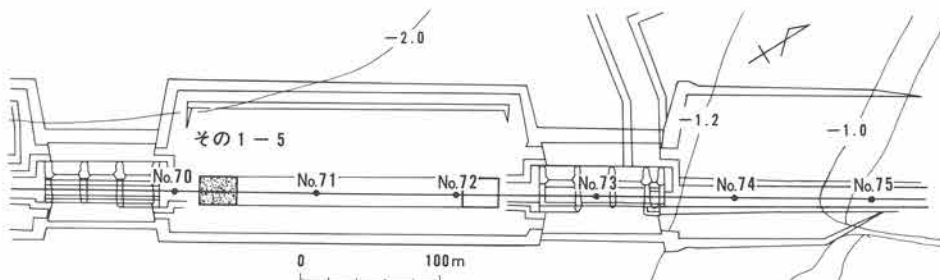


図40 湖岸堤津田江その1(5) トレンチ位置図

15. 志那漁港航路浚渫 志那湖底遺跡

1. はじめに

志那湖底遺跡は古くから銅鐸をはじめとした遺物の出土が知られており、近年は琵琶湖総合開発に伴って数次にわたる調査が行われている。今回の調査は志那漁港航路浚渫に先立つものであり、昭和61年度の試掘調査の結果にもとづいて本格調査を行なうこととなった。調査地点は漁港の沖合い約400m付近であり、約900㎡（30×30m）を対象に調査を実施した。

2. 調査の経過

調査にあたっては調査区を鋼矢板で二重に囲んでドライ化した。湖底面は起伏が激しく、北側に高まりがみられた。試掘の結果では湖底面の泥土以下の各層で遺物が出土しているため、慎重にバックフォーで掘り進んだ。しかし調査区の東半部は掘り下げを進めても泥土がブロック状に混じる攪乱土が続き、BSL（=84.371m）-3.5m付近でようやく旧地盤を確認した。西半部では攪乱が少なく、縄文土器を包含する粗砂層を検出した。

3. 調査の結果

調査区西部の縄文土器（後期～晩期）を包含する粗砂層を中心に調査を進めたが、土器片はローリングも激しく二次堆積と考えられる。これ以下の土層は青灰色細砂と粘土の水平堆積がみられるのみであった。なお、泥土直下で航路主軸線方向に4条の溝状遺構が検土されたが、時期的に古いものとは考え難い。近代以降の船の運航によってできたものであろう。その他には遺構は認められなかった。

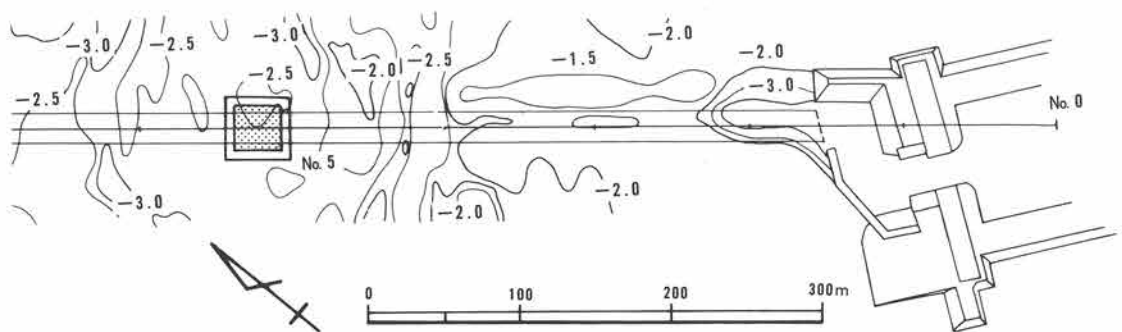


図43 志那漁港航路浚渫 トレンチ位置図

4. おわりに

湖底面にみられた激しい起伏は、近年の砂取り船による攪乱によるものと判明した。器具を引きずった瓜路状の溝も多方向にみられ、数次にわたって攪乱を受けている。ただし攪乱土中には縄文時代から平安時代に及ぶ遺物が含まれており、遺跡の存在は裏付けられた。周辺の工事にあたっては十分な注意が必要である。

(井上洋介)

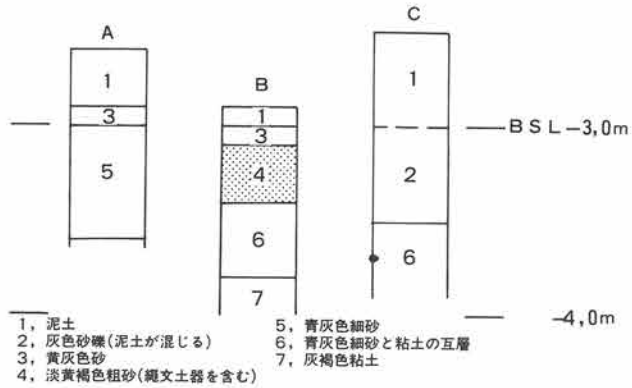


図45 志那漁港航路浚渫 土層柱状図

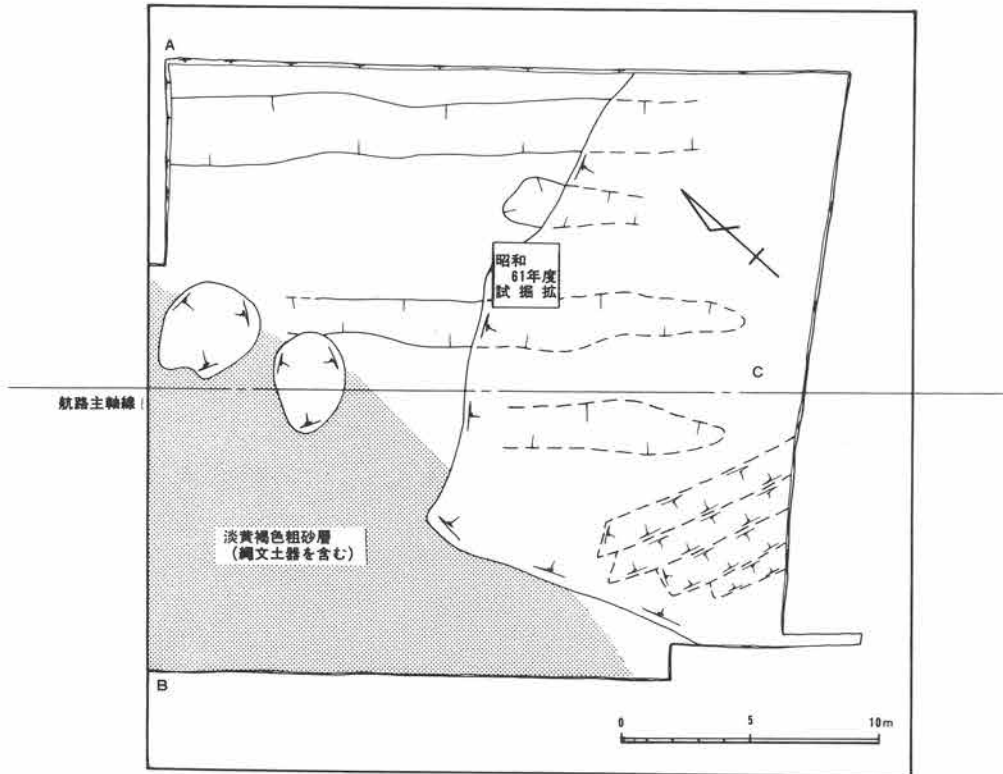


図44 志那漁港航路浚渫 調査区全体図

16. 南湖航路 粟津湖底遺跡

1. はじめに

粟津湖底遺跡は天津市晴嵐町地先に所在し、琵琶湖の最南端・幅 約400mの瀬田川流入部の中央付近の湖底に位置する縄文時代の貝塚である。当遺跡は昭和27年、藤岡謙二郎氏によって発見、紹介された。

今回の調査は南湖航路浚渫工事計画に伴うもので、貝塚の範囲を確認する目的で潜水試掘調査を実施した。

2. 調査経過

前年度に確認した貝塚の四囲に、9本の調査基準線を設け、これにそって3m×2mのトレンチを合計74ヵ所設定し、調査した。なお原則として掘削は貝層を検出した時点で取り止め、貝層は掘り込まないこととした。さらに貝層の厚さ、下層貝塚の有無を確認するために、6ヵ所のピット調査と5ヵ所のボーリング調査も合わせて実施した。

3. 調査の結果

0～20cmの表層（淡褐色砂礫層）の下に10～30cmの貝層がある。貝塚は東西に2ヵ所並列してあることが今回明らかになった。東側の貝塚（第1貝塚）は前期～中期にかけて形成されたもので、広い範囲に貝塚が広がっている。縁辺部の混貝層まで含めると、南北110m、東西70mに及ぶ。西側の貝塚（第2貝塚）は早期（押型文）～前期にかけて形成されたもので、貝塚は小さいが、混貝層は南北70m、東西30m+?mに広がっている。貝塚はセタシジミ・カラスガイ・タニシ等によって構成されているが、大多数はセタシジミである。貝層には鹿猪を中心とする獣骨を多く含んでおり、人骨もわずかながら出土した。また貝層の上又は同位置層中に部分的に腐植物層が検出された。この腐植物層はクルミ・ドングリ・ヒシ・トチ等の木の実で構成されている。

4. おわりに

今回の調査によって粟津貝塚は早期に始まること、時期によって貝塚の場所を移動していること、が明らかになった。

（伊庭 功）

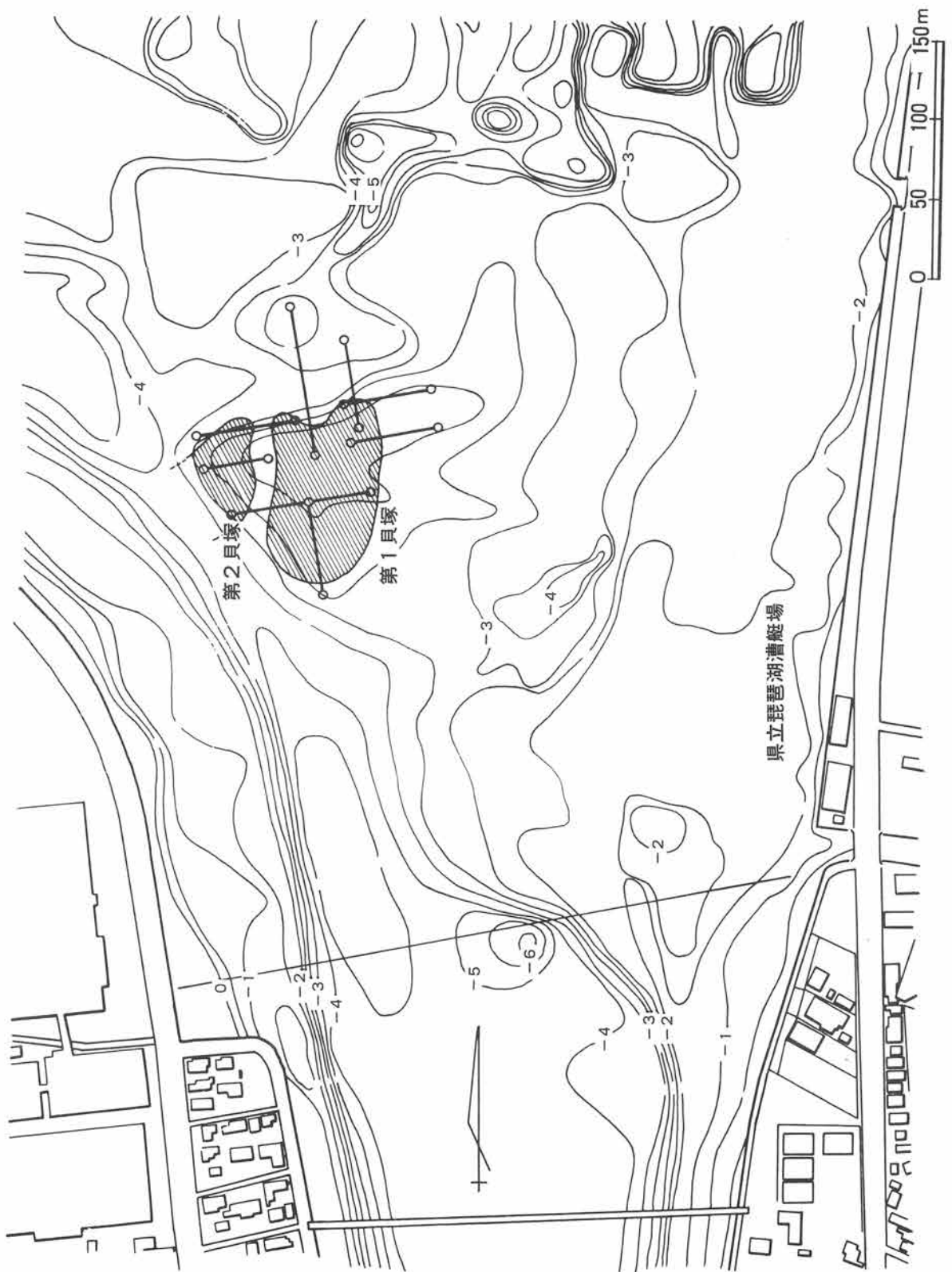


图46 南湖航路調査地点位置图

17. 南湖航路浚渫 栗津湖底遺跡

1. はじめに

栗津湖底遺跡は天津市晴嵐町地先に所在し、琵琶湖の最南端・幅 約400mの瀬田川流入部の中央付近の湖底に位置する縄文時代の貝塚である。当遺跡は昭和27年、藤岡謙二郎氏によって発見、紹介された。

今回の調査は南湖航路浚渫工事計画に伴うもので、計画航路内における遺跡の有無を確認する目的で潜水試掘調査を実施した。

2. 調査の経過

前回の調査で確認された貝塚を避けたふたつの計画航路（西ルート案・東ルート案）において試掘調査を計画した。西ルートは計画航路内に第2貝塚が広がることを確認したのち、それ以上の調査をとりやめ、かわって東ルート内の試掘調査を全面的に行なうことになった。

3. 調査の結果

西ルート

第2貝塚が計画航路内に少なくとも10m以上広がることを確認した。貝層は10～30cmの淡褐色砂礫層の下にあり、暗褐色粘土層の上に薄く存在する。土器は縄文時代早期（条痕文系土器）を中心とする。貝・土器のほか、獣骨・石器が検出された。

東ルート

貝塚は計画航路内には及んでいない。前回の調査でも確認された貝塚の外延に広がる堅くしまった貝を含む黒色汚染層が、湖底下30cm程でNo.14・15付近を中心に検出されている。遺物量は多くない。また調査区南端のNo.27・31では多量の土器が出土している。時期は縄文時代前期～中期である。

4. おわりに

従来より貝塚に対応する居住域が問題になっていたが、今回の調査区の南端から多くの遺物の出土をみたことが、この問題の解決の糸口となるかもしれない。

(伊庭 功)

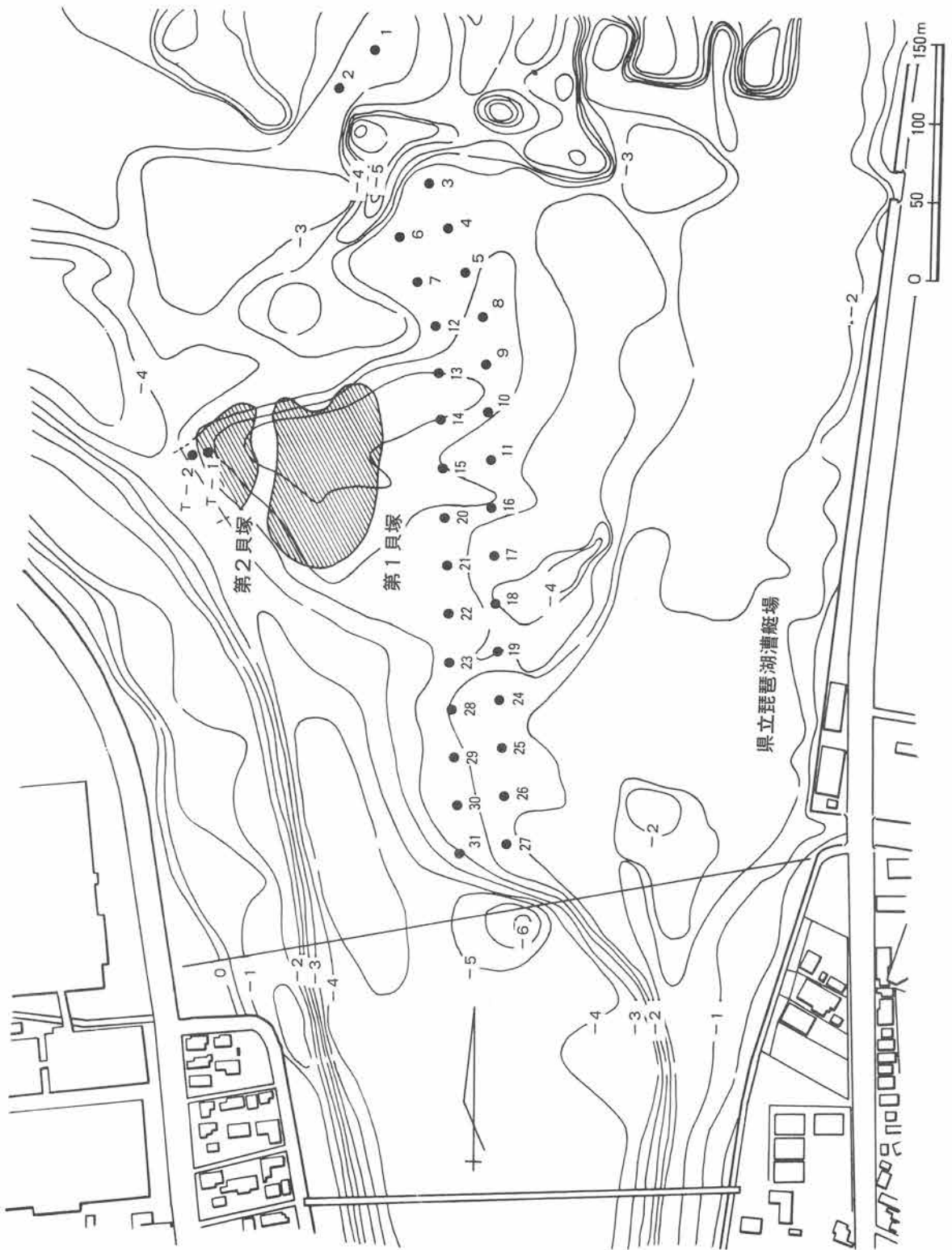


图47 南湖航路淤滩调查地点位置图

18. 唐崎マリーナ 唐崎遺跡

1. はじめに

唐崎遺跡は大津市唐崎町地先に所在し、「唐崎の松」で有名な唐崎神社周辺の尖状三角洲の先端部一帯に広がっている。遺跡は弥生土器の散布地として周知されており、文献上においても平安時代の祓所として知られている。前年度の調査では砂層のなかから多量の弥生土器片が出土し、さらに平安時代の土師皿とともに板状木製品が出土して、祓所との関連が注目された。

2. 調査の経過

3本の航路案の法線そって、約50m間隔に、合計11ヵ所の調査地点を設定した。各調査地点に3m×3mのピットを設定して、浚渫深度のBSL-3.5mまで水中掘削を行ない、潜水調査を実施した。

3. 調査の結果

前年度検出されたのと同じ白色砂礫層の上に、厚く粘土・シルト・細砂が堆積している。これは前年度の調査区よりも低い今回の調査区に溜ったものと思われる。

出土遺物は前回よりもバラエティーに富み、縄文土器（前期他）、弥生土器、須恵器（古墳時代・奈良時代）、土師器がある。調査したすべてのピットから多くの土器が出土している。出土層位は砂層・砂礫層であるため、明確にはし難いが、下層の砂礫層にも土器は含まれるようである。また、土器の磨滅は少なく、遺存状態は良好である。概して残りの良い縄文土器は沖合に集中する傾向にある。

4. おわりに

これまで湖西南部では縄文時代の湖底遺跡は、湖東南部に較べて知られることが少なかったが、今回の調査の結果は、その数少ない一例となろう。また、奈良時代の土器の出土を見たことは、唐崎周辺の湖底から採集されたといわれる土馬との関連が考えられよう。

(伊庭 功)



図48 唐崎マリーナ 調査地点位置図

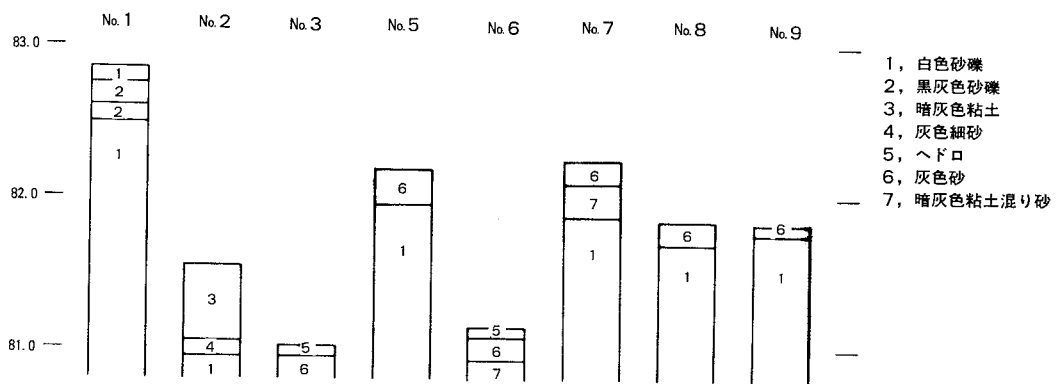


図49 唐崎マリーナ 土層柱状図

19. 大溝漁港航路浚渫 大溝湖底遺跡

1. はじめに

大溝湖底遺跡は高島郡高島町大溝地先に位置する。この地は昭和55年度の「滋賀県文化財目録」には遺跡には記載されておらず、昭和61年度の潜水試掘調査によって遺跡に決定づけられた所である。当遺跡は水資源開発公団の大溝漁港航路浚渫に伴う事前調査として昭和62年度から発掘調査が開始された。それによれば、縄文時代晩期から弥生時代前期のスクモ層に覆われた埋没林が13個所で検出され、さらに東南の方向へ延びるものと予想されている。

2. 調査の経過

今回の調査地は、前回の調査地から南東へ45m～50m離れており、埋没林の南限とそれに伴う住居跡等の遺構の検出を目的として調査を行なった。

調査範囲は航路浚渫部分のNo.11+16m～No.15+6mまでの70m×25m（1,750㎡）である。

3. 調査の結果

湖底の状況は全面褐色の砂に覆われており、他地域に見られるヘドロは皆無であった。湖底面から約2m下がった所までは全て砂が堆積し、西端には青灰色粘土、東端にはスクモがわずかに認められた。地形はゆっくりと東に傾斜し、トレンチの東と西では湖底面で50cm～60cmのレベル差を生じている。トレンチの北東に長辺に合わせて掘削した排水溝での断面観察によれば、No.13付近では水平な堆積であるが、東へは右下りに、西へは左下りに傾斜した層は、小礫と砂が交互に堆積しつつ

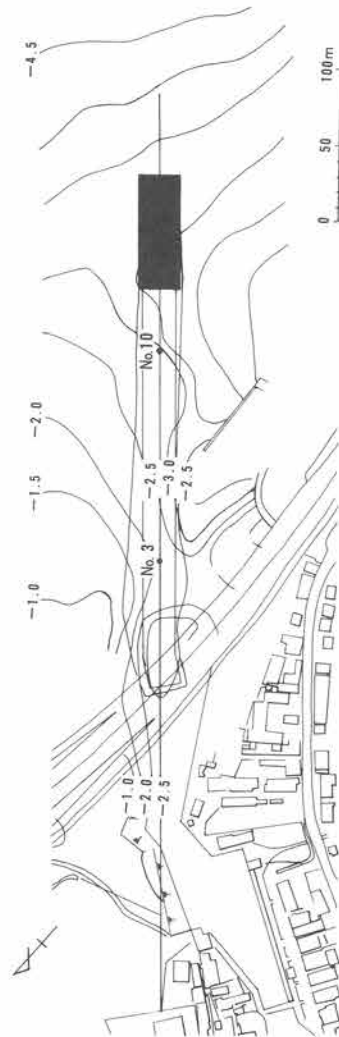


図50 大溝漁港航路浚渫 トレンチ位置図

トレンチの東端まで続き、平面でも縞状になって観察されている。また、左下りに傾斜した砂層は、上下に青灰色の粘土を挟んでいる。遺物は、トレンチの西半分に集中して見られた。堆積の水平な部分で最も多く検出され、そのほとんどが縄文時代晩期の土器であった。土器の多くは外面にローリングによる摩滅を受けており、他所から運ばれてきたものと考えられる。

4. お わ り に

今回の調査では、縄文時代晩期の土器を2次堆積した縞状の堆積層を検出できた。これは縄文時代晩期以前に湖岸線を形成した際、湖水の流れによって運ばれた礫や砂が打ち寄せられたものであろう。この礫層や砂層中に縄文時代晩期の土器が含まれていたのである。前回検出された埋没林の南限とそれに関連した遺構の拡がりは、今回は検出できなかった。1つには、湖底の等高線が記載されている地形図を見ると、前回のトレンチと今回との間が谷状の落ち込みで区切られ別々の微高地上に立地していることがわかる。2つ目には当トレンチ内にスクモがほとんど堆積しておらず、湖水に運ばれた再堆積砂礫層によって形成されていたことが挙げられる。前回のトレンチ周辺で縄文時代晩期～弥生時代前期頃の樹林が形成されていた頃、当トレンチ周辺は現在より低く湖岸線であったためであろう。

(三宅 弘)

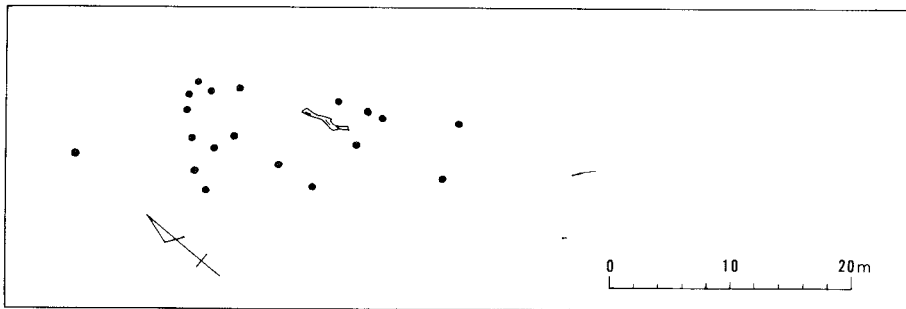


図51 大溝漁港航路浚渫 平面実測図 (●は土器を示す)

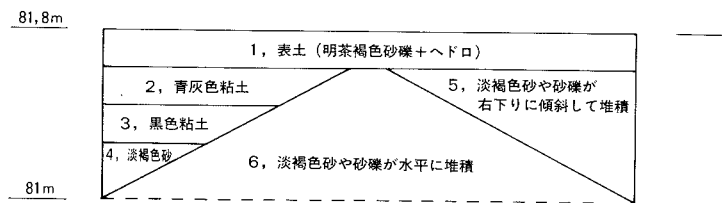


図52 大溝漁港航路浚渫 土層図

20. 針江大川舟溜航路浚渫(2) 針江浜遺跡

1. はじめに

調査対象地は、高島郡新旭町針江地先の湖底に立地しており、前年度の調査では弥生時代中期のヤナギからなる埋没林と噴砂痕等が検出されている。

2. 調査の経過

今回の調査は62年度調査区より岸に40m寄った部分2,100㎡を対象に実施した。対象地は昭和61年度に実施した試掘調査の際、多量の弥生時代前期の遺物の出土を見た処である。

3. 調査の結果

調査の結果4面の遺構面の存在することが確認された。第一遺構面はT・P82.3m付近にあり耕作痕と考えられる溝状遺構21条と杭および板で護岸された道と考えられる遺構が37mにわたって検出された。護岸に用いられている板材の大きさは多様であるが、最大のもので、幅約60cm、長さ約450cm、厚さ約5cmを測る。第二遺構面はT・P81.8m付近にあり、溝状遺構、土壇等からなる。溝状遺構のうち6条（いずれも幅40～70cm、深さ10～20cm）は、幅約540cm、深さ約120cmを測る大溝と一ヶ所で合流しており、低湿地における土地利用を考える上で興味深い。また掘立柱建物も1棟検出されている。さらに前年度検出されたものと同様の噴砂痕も検出されている。第三遺構面は、T・P81.5m付近にあり土壇等からなると考えられるが、詳細は不明である。ただここからは、排水溝を掘削した際、多量の遺物が出土している。第四遺構面はT・P81m付近にあり、少量の遺物を含む。各遺構面の年代は次の通りである。第一遺構面・年代を推定し得る遺物の出土がないため不明である。第二遺構面・弥生時代中期、第三遺構面・弥生時代前期、第四遺構面・縄文時代後期～晩期と考えられる。今年度の調査は第二遺構面と、第三遺構面の一部まで終了した。

4. おわりに

今回の調査から当遺跡は当初の予想に反し数時期の遺構が重複していることが判明した。このことは、現在の湖底にもかつて豊かな人間生活の営まれた時代のあったことを雄弁に物語っていると見えよう。なお、各遺構がさらに沖側に延びていることから、今後、今年度調査区と、62年度調査区間の部分も調査対象区に含める必要があると考えられる。

(大沼芳幸)

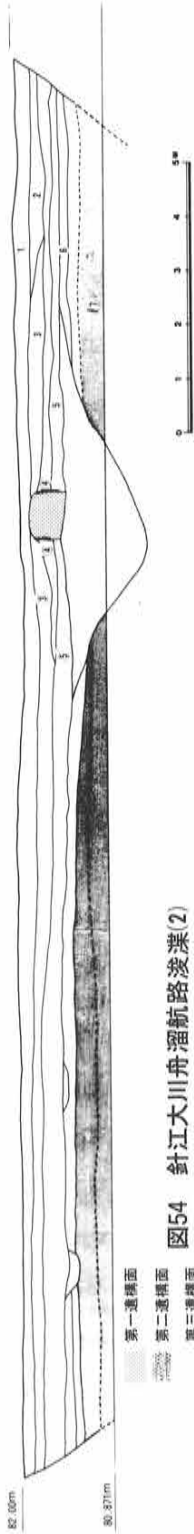


図54 針江大川舟溜航路浚渫(2)

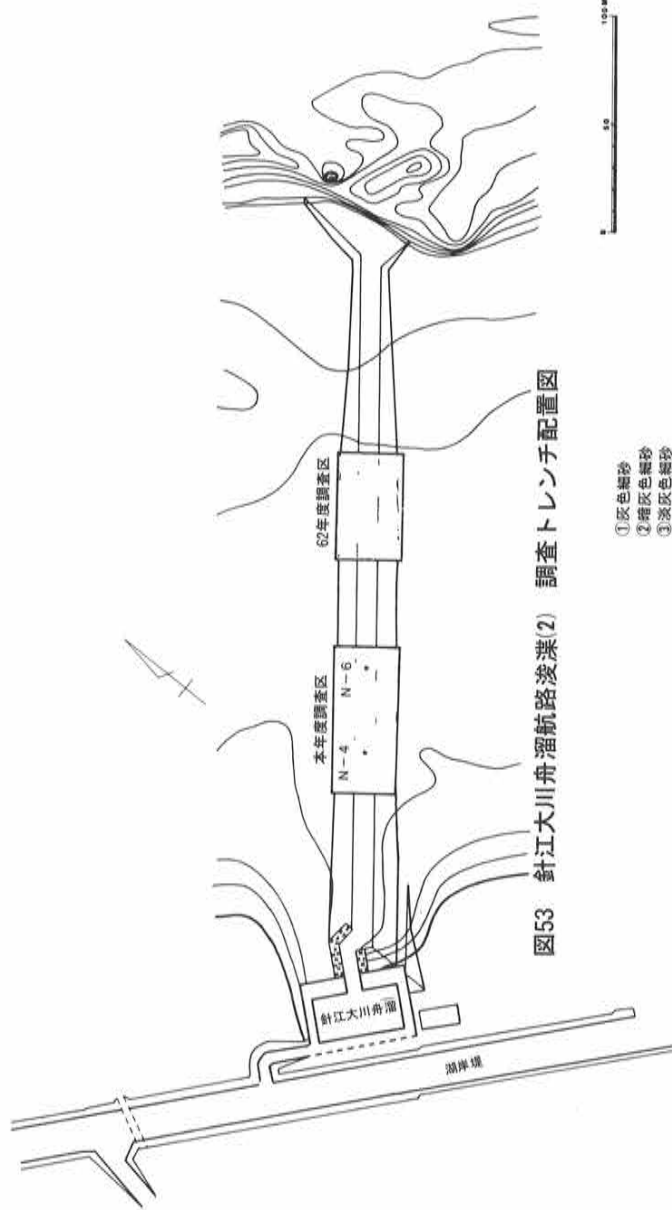


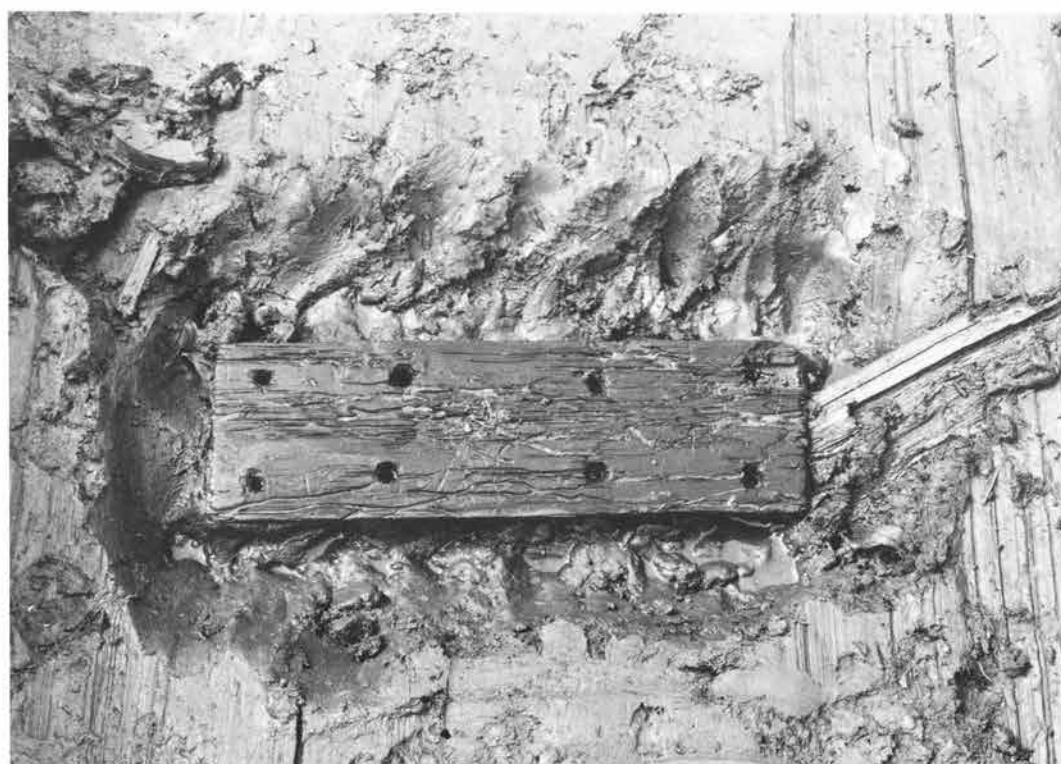
図53 針江大川舟溜航路浚渫(2) 調査トレンチ配置図

- ① 灰色細砂
- ② 暗灰色細砂
- ③ 淡灰色細砂
- ④ 灰色粘土
- ⑤ 暗茶褐色粘土
- ⑥ 茶褐色粘土
- ⑦ 乳灰色細砂

版 图



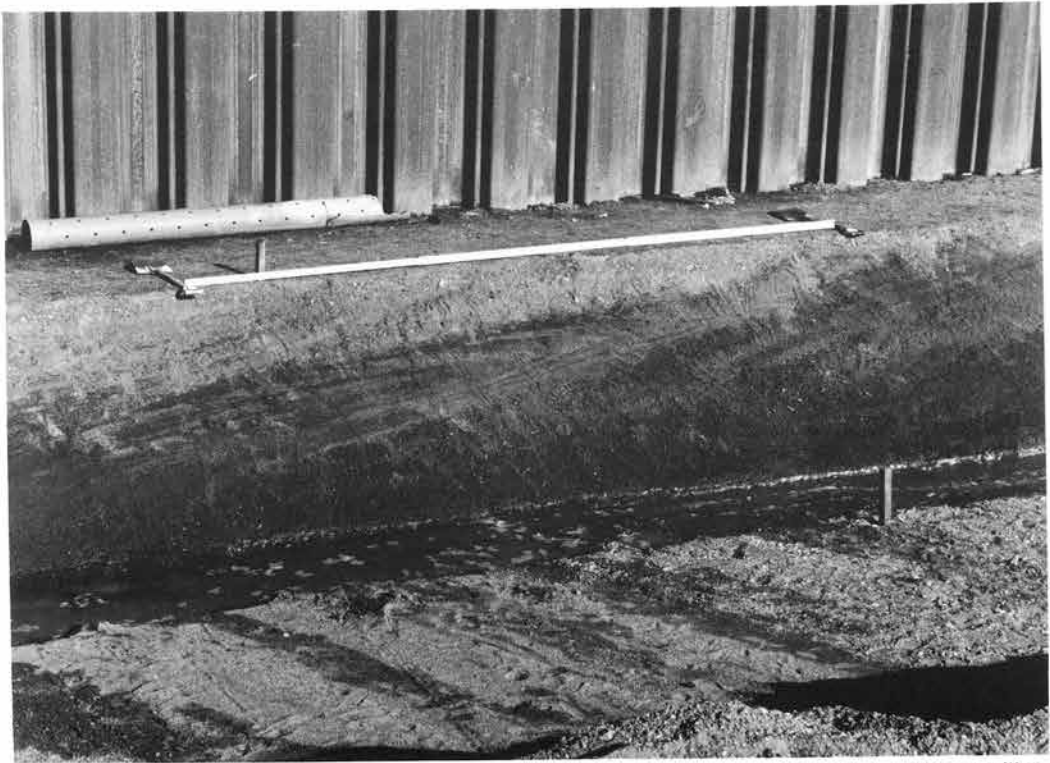
トレンチ全景



木器出土状況



水平面に見える斜層理の様子



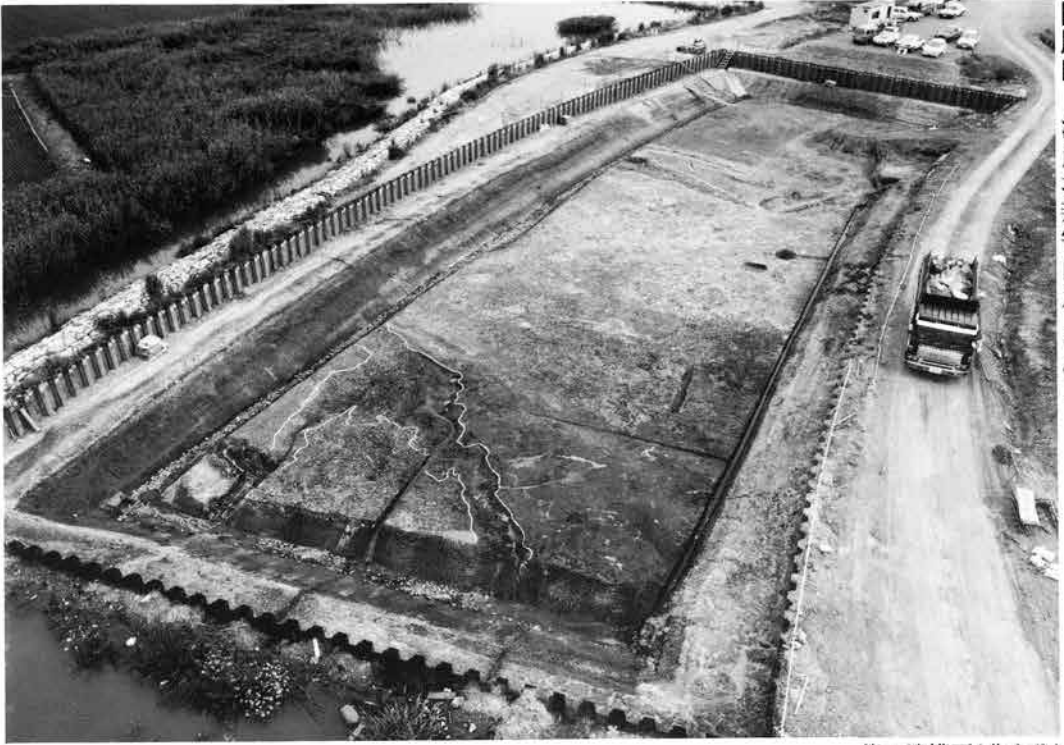
断面に見える斜層理の様子



調査区周辺全景(手前が調査区)



旧河道検出状況(南より)



第1遺構面(北より)



第2遺構面(北より)



旧河道 1 検出状況(南より)



包含層 木製品出土状況



調査状況



遺物出土状況



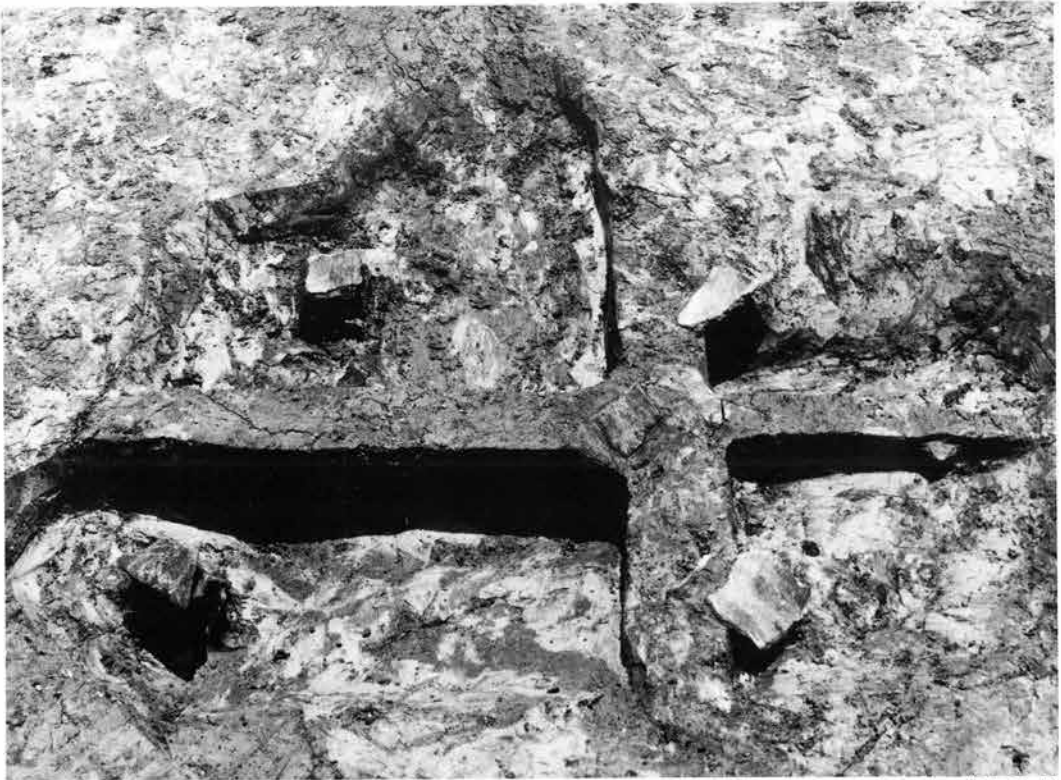
調査状況(北から)



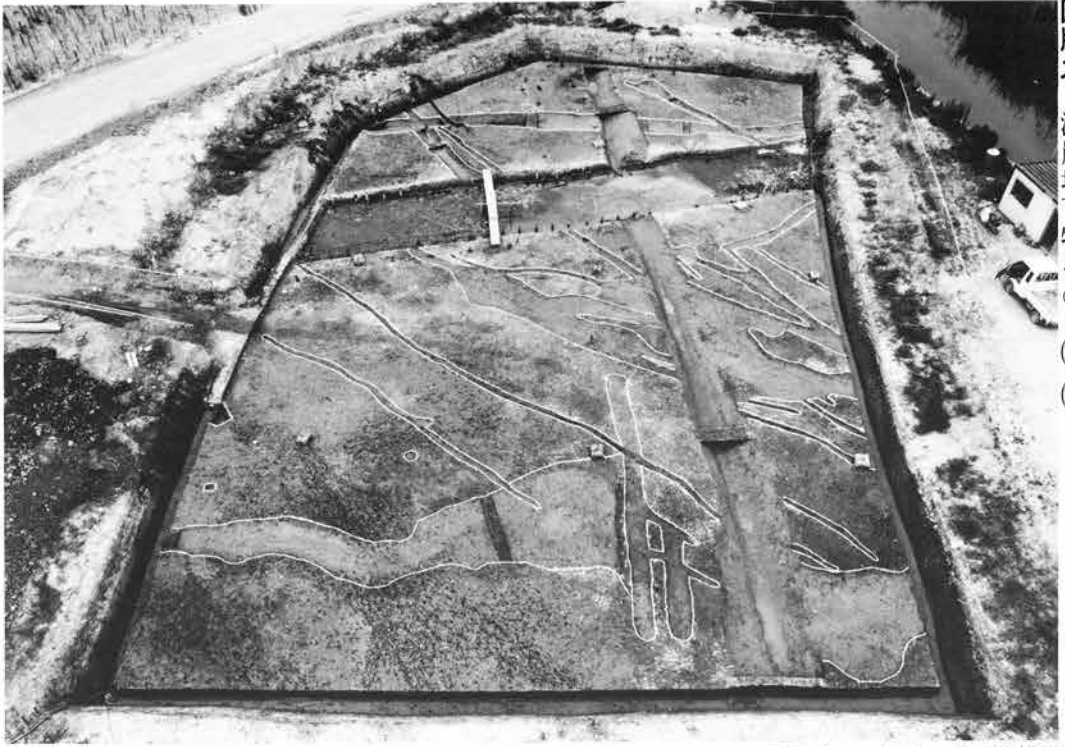
T 6 遺物・遺構検出状況(南から)



1-(4)区全景(南より)



1-(3)区土壇



下物その2(E) 第2遺構面



下物その2(F) A区 第1遺構面



調査地遠景(南東から)



調査状況



作業状況



トレンチ断面



トレンチ全景



土器出土状況



調査前状況



調査前状況



調査前状況(西より)



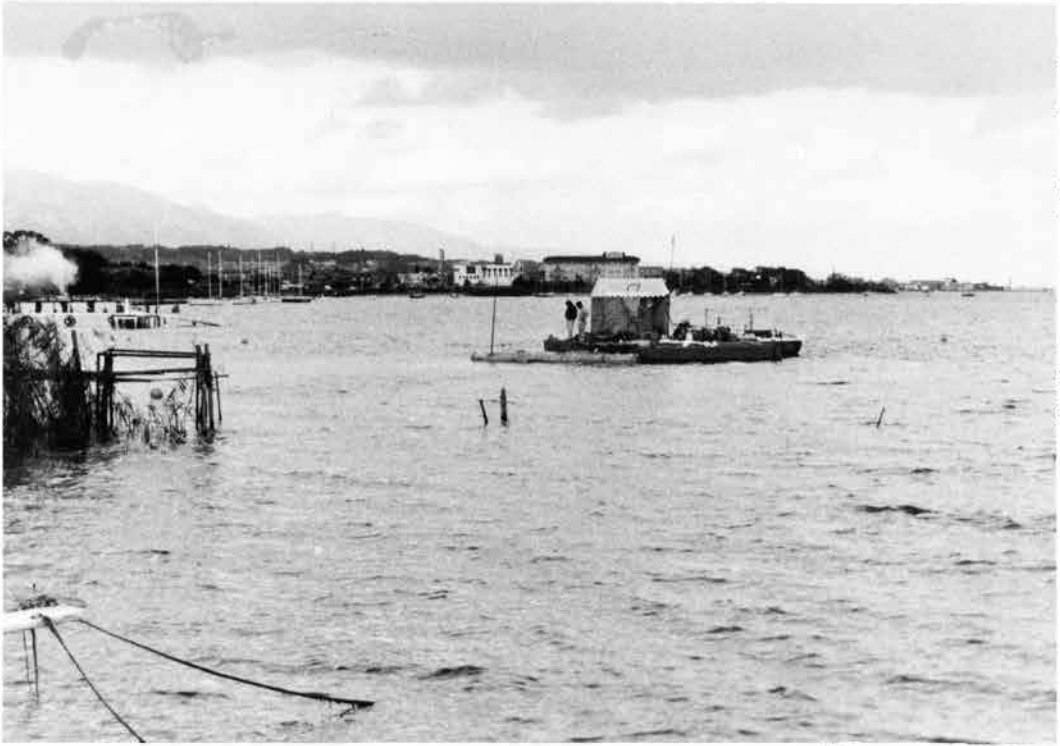
調査区全景(西より)



南湖航路 出土遺物(押型文)



南湖航路浚渫 作業状況



唐崎マリーナ 調査状況



志那沖 作業台船



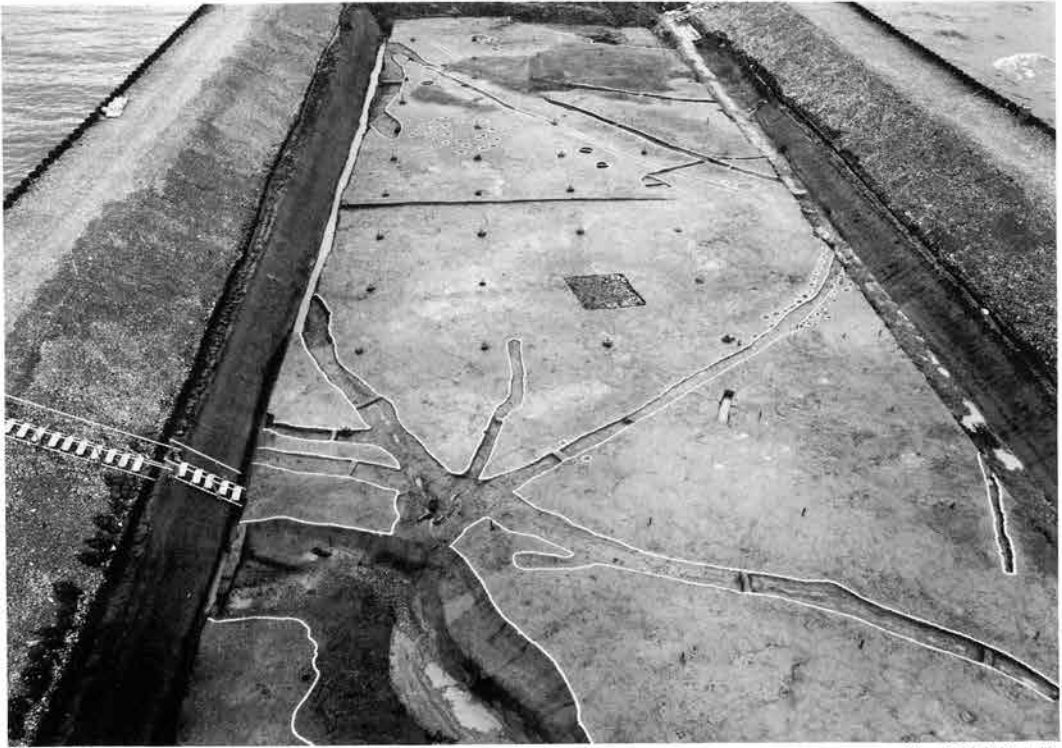
トレンチ全景



旧汀線



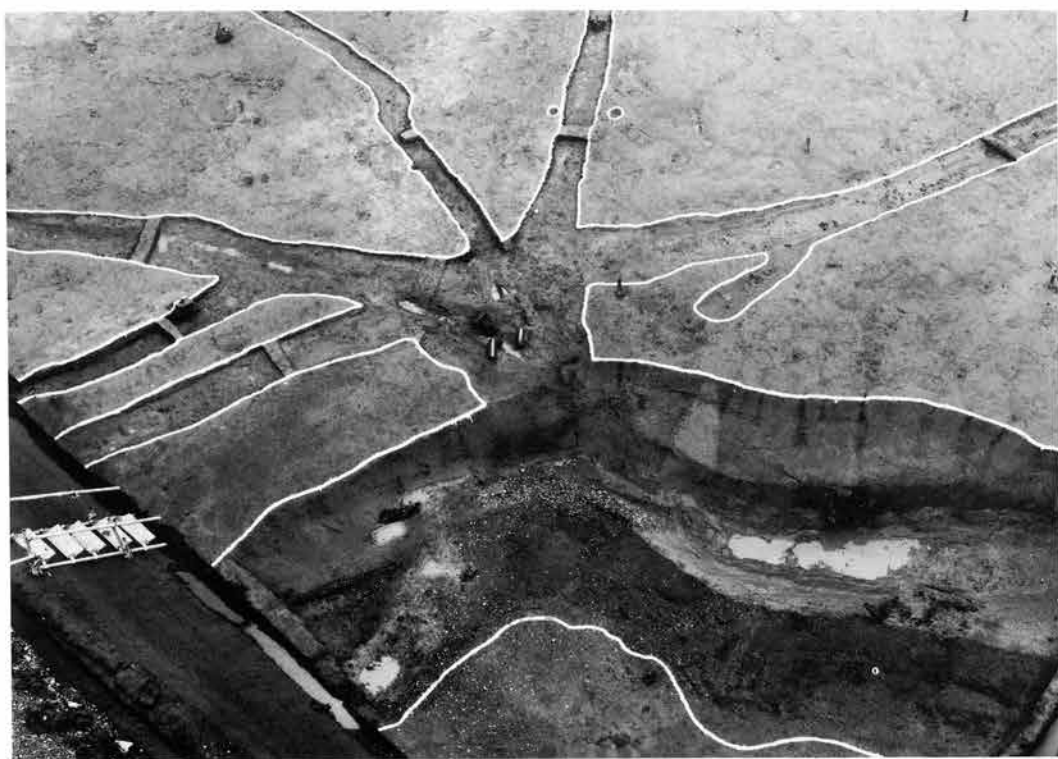
第1遺構面全景



第2遺構面全景



第1遺構面 畦



第2遺構面 溝

平成元年 3 月

文化財調査出土遺物仮収納保管業務
昭和63年度発掘調査概要

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課

大津市京町四丁目 1 - 1

電話 0775-24-1121(内線2536)

(財) 滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

電話 0775-48-9781

印刷・製本 明文舎印刷商事株式会社

滋賀県長浜市朝日町22-16

電話 0749-63-1441(代)